

ロッキンブルーな君に捧ぐ

優詩織



# CONTENT

第一章 夜明けとともに

5p

第二章 未知の領域

28p

第三章 上昇

44p

第四章 新天地

57p

第五章 きらめき

70p

第六章 狼煙

83p

第七章 絶頂

94p

第八章 決壊

112p

第九章 ずれていく

121p

第十章 決起

139p

第十一章 自由

153p

第十二章 朝焼けとともに

170p



第一章 夜明けとともに

私の城は六畳の自室のみだった。

カーテンはいつも締め切っていて、仄暗い部屋には光は差し込まない。ベッドとソファ、テーブル以外には何も目立つものはない。

殺風景な風景、というのであろう。何もなくて、寂しくて、空気も冷え切っている。

私にお似合いの、しょぼくれた部屋だ。

私は電気もつけずに、そんな暗く淀んだ場所でジッと一人分のソファにうずくまっていた。

「桃、ごはん」

コンコンと扉をノックする自身の母の声に無言という圧で答えると、向こう側からため息が聞こえてくる。

「いい加減、外に出てきなさいよ」

吐き出すような言葉はそれ以降何も聞こえず、どうやら捨て台詞のようにその場に置いて去っていったようだ。

食欲はなく、扉を開ける気もない。

閉鎖的な部屋は、私の心の中を表しているかのようだった。

「今日も居場所は、ここしかない」

私はひとり、スマートフォンを起動させた。

『今日の歌も楽しみしています！』

『モモ！ 待ってるぞ！』

『まだかなー、モモちゃんまだかなー』

そんなネットの優しい書き込みを見つけて、私は今日も安堵する。

気持ち切り替えるべく眼鏡をクイツとあげ、口を開くのだ。

「今日も、私の曲、聞いてくれる？」

私は、高校生のはずだった。

「ねえねえ、黒瀬さん」

お昼休みにニタニタと教室で薄ら笑いを浮かべてくる、君の悪い髪色プリンの女たち。

教室で本を読んでいると話しかけられたので、私は本を閉じて問う。

「なに」

「こわあ、とクスクスされたのちに、彼女たちは楽しそうに腰をくねらせながら私に問い続けた。

「黒瀬さんってさ、何でそんな暗いの？」

「は？」

「だから、なんで、そんなに、くらいの、って」

聞こえまちえんでしたか？ と露骨に赤ちゃん言葉を使ってくる彼女たちは、私をおちよくすることを心の底から楽しんでいらしい。

何故私がこうもいじられるようになったかなんてそんなのはわからない。大抵、彼女らの気まぐれにすぎないのだろう。

だが、私はその気まぐれがどうしても理解できなかった。

「暗いかどうかなんてあんた達の主観でしょ。それに私は好きで暗いわげじゃない。読みたい本があるから読んでいるだけ。そういうふう突つかかってくるほうがよっぽどめんどくさいけど」

一息にそう言って、また本を読むのを再開した。

だが彼女たちは逃げるところか、私が読んでいた本を取り上げた。

「なんの本読んでんの？ 見せろよ」

「なになに？ プツ、何これ。めちやくちや難しくてわかんない」

「アレじゃね？ 活字オタク。きつも」

まじうけるんだけどと続ける彼女らのなんと汚いことか。私は別に義務教育時代にいじめを受けたこともないし、引きこもりになったこともない。

少し頭が悪くてこの学校に入ったら、ヤンキーな女に絡まれてこのザマだ。

私って、つくづく不幸な女。

「これ、返してほしかったらお金頂戴？」

「カツアゲかよ、最高」

「いくらにしよっかなー、千か、万か」

「そりゃ万つしょ！」

ギャハハという気持ちの悪い声が教室に響く。

大体この教室にいる他の人間は何なのだ。普通漫画とか読んでたらやめなよってだれか助けられるところなのに、どうしてこいつらは耳に入れることを防ぐようにイヤホンをつけているのか。どうして、私自身も空気として扱うのか。

被害者と加害者を亡きものにしてこの教室に耐えきれず、私は逃げ出した。

「あつ、おい」

ヤンキーに首根っこを掴まれるものかと振り払って逃げ出し、カバンも持たずに走り出した。

そして外に出て、曲がり角を曲がって。

走って、走って、走り続けて。

「桃、学校は？」

私は、その日以来家から出ることを辞めた。

外に出るのが怖くなった、というのもある。教室では泣くのを我慢していたが、家に帰ってからわんわんと泣いた。

今日はもう寝なさいと機嫌の良い母に優しく背中を擦られ、私は自室に引きこもり、鍵をかけた。

そうして、引きこもりの私は完成した。学校を辞めるか否かはまだ協議中で、この五月の初夏の中、私は日がな一日ベッドでごろんごろんと転がっている。

そんないじめられっ子の私が、唯一輝ける場所。

『あなたの歌を聞かせて！ ミュージックチャット、略してミュチャ！』

ミュチャ、というのは自分のカバーした歌などを配信しみんなに聞いてもらおう、歌ってみたサイトである。

勿論そこで歌わずに誰かが歌っているものを聞く、聞く専門の人略して聞く専もいる。

不登校になって一週間後、私はこれを始めたのだ。

理由はもう、忘れてしまった。

『モモまだかな!』

『はやく歌ってくれよー!』

『たのしみ!』

四月から始めたとはいえ、フォロワーの数はすでに三百人を超えていた。

私は誰かに認められることの愉悦をほんの少しだけ感じながら、今日もスマホをセットしカメラを切り、にっこりと笑う。

「みんな、準備はいい?」

私がそう告げ、三百人のためのライブは今日も始まる。

夏休み前、私は親とともに制服で学校に呼び出された。

ヒョロいゴボウのような見た目の担任と逆にたぬきのようなぽっちゃり校長との五者面談の中、校長がどつしりとソファに背を預ける。

「えー、まあ、おたくの娘さんはちょっと」

その口ぶりから、私がこの学校に相応しくない生徒ということは明らかだった。

オブラートに包んでいるがざっくりとした内容は「うちの学校になんで入ったの、正直めんどくさいんだよねあんた、自主退学してくれない？」ということであった。

だがそれを私も両親も顔色ひとつ変えずに聞いていた。教師陣は私達の表情が変わらないのに驚いたのか、少し顔を見合わせてえへんえへんと実に不快な咳をした。

「じゃあ、まあ自主退学ということぞ」

ね？ ね？ と首を傾げてくる教師に、私はふんとため息をついた。

「どうぞ」

私のその声に、教師はホッとした顔をして両親に話しかける。

「いやー助かりました！ ねえねえお母さん。お父さん。あーホッとした、じゃあここにサインを」  
私は、別に学校を辞めたとしてどうにかなると思っていた。何故かはわからない。見栄を張っていたのか、はたまた別の学校に行けばいいやと思っていたのか。

書類に適当にサインをして、じゃあもう一生涯ようならと思いつながら学校を出たとき、三階の窓から泣き叫ぶ声が聞こえた。

「やめてよお！ 本返して！」

「やーだ、お前マジ面白いな」

私の他にターゲットがいたのだろう。あの女どもは眼鏡の太つちよな男の子をいじめていた。

「ばかみたい」

私はそう言つて、親と車に乗つて歸つた。

だが、このまま歸れる、とはならず。

「お前どうするんだ、ふざけるなよ」

車に乗り込んだ刹那、父親にグーで殴られた。こうなつたのはお前のせいだ、と言わんばかりに。

母親は止めず、蔑むような目で見てきた。こうなつたのは誰のせいだ、と言わんばかりに。

似た者夫婦だなあと思ひながら、私はごめんなさいごめんなさいと言ひ続け、ただ殴られた。

そうしてポコポコにされたところで、お前だけ歩いて歸つてこいと放り投げられ両親だけで歸つた。

家までは車で二十分、歩いて約一時間半だ。歩いて歸れる距離ではないが、少ししんどいかもしれない。埒が明かないので、私は歩き出す。

だが、夏の暑い日に水も飲まずに徒歩で歸るのは酷だった。ゼエゼエと息が止まらない。汗も、ふらつく頭も。

携帯だけがスカートのポケットに入っていたので、これを無くしたら終わりだと言わんばかりに私はスカートをぎゅつと握りしめて歩いた。

世間から見たら虐待だと言われそうだが、これはあくまでも私の責任だ。

父と母は、やさしいときはやさしいが、厳しいときは物凄く厳しかった。気分がいいと飴ちゃんやクッキーを買ってきてくれるが、機嫌が悪いと話しかけただけで舌打ちをされ、私が悪いことをすると平手打ちをする。

中学の頃それを友達に話したらとてもドン引きされたことを覚えている。でもそんな家で育ってしまったものだから、殴られるのが当たり前になってしまっているのだ。

それはおかしいよ、と言われたとて私はそうやって生きてきたんだからわかんないよと言う。甘い家庭で育ってきた人達とは、一生分かり合えない気がする。

そんなことより、帰ったらどうしよう。親になんて言おう。通信課程の高校に通わせてください、と頭を下げねばならないのか。教師と対峙したときに親が何も言わないものだから、てつきりこれは辞めろという合図なのかと思ってしまった。でもそうではなかった。親は私に、すみませんでしたと謝る期待をしていたのだ。目測を見誤った。親は私に、す

そんなふう考えたのもつかの間、駅前の横断歩道にたどり着いた。

ここを渡つてすぐ右に曲がれば、私は家についてしまう。また、親に殴られるかもしれない。ああどうしよう。なんて言い訳しよう。どうすれば。

「困ったなあ」

ブーツ、ブーツ。

信号が変わるのを待っていると、スカート内の携帯が鳴った。私はごそごそと手を突っ込んで取り出し、携帯を確認する。

見慣れない番号からの着信に、私は恐る恐る電話に出る。

「もし、もし？」

私は熱中症になりかけているのだろうか。一時間ぶりに出した声は、ほんの少し掠れていた。

『もしもし。黒瀬さんの娘さんですか』

「は、はい」

ちら、と信号を見ると青が変わっている。私は周囲が歩くのと同時に、急いで足を進めた。

「いいですか、落ち着いてよく聞いてね」

はい、とつぶやき、自分の家に帰るための道を曲がったとき。

「あなたの、ご両親が」

目の前に、ニュースキャスターたちと、取材班と、そして黄色の立入禁止のテープ。

目の前に立つ警察、奥の私の家、そして。

「事故で、亡くなりました」

焦げ臭い匂いとともに、さっきまでピカピカだった父の愛車が、キャンピングカーの下で吐

き出したガムのようにぺちゃんこになっていた。

出会い頭の正面衝突、だったらしい。

父親はイライラしていたこともあってスピードを飛ばしに飛ばしていて、向こうの運転手もスピードを飛ばしていた。母親は後ろに座り、シートベルトをつけていなかった。そうして、不注意で激突してしまったのだ。

向こうは奇跡的に軽症で住んだらしいが、うちの両親は打ちどころが悪く即死した。父親は圧死、母親は事故の衝撃にフロントガラスから自身を投げ出され地面を這いつくばるように死んでいたらしい。

その後両親の葬儀は、しめやかに行われた。

母の遺族も父の遺族も、私の心配よりも財産の話をしていた。

でもそのお金は私に行くとした途端に、今度は私をめぐる争いが始まった。

私の親権を取れば、親の遺産がどっさりと自身の手元に置かれるのだ。

私はそんなキナ臭い話の中、俯きがちにつぶやく。

「おねがい、ひとりにして」

本当にその言葉通りに、お金をめぐる話はこじれにこじれて、私の親権どころではなくなった。親も学校も失った私には、放っておく時間が欲しかった。何も考えず、好きなことをするときがほしかった。

正直高校も辞めているし、働ける年だ。自分のことは自分でなんとかできる、はず。

そうしているうちに一ヶ月がたつて、私は誰もいなくなった広いキッチンで、一杯の紅茶を入れた。両親が死んで、悲しいというよりもホッとした私は薄情なのだろうか。ソファに座ってマグカップに口をつけながら、私はぼうっとする。

もう殴られないんだ、と思つたら安堵してしまった。良かったと思つてしまった。

親がいなくても、家事は一通りできる。だがどれだけ私を殴つた親だったとはいえ、優しい面があったのも事実。寂しいのも、なんだか心にポツカリ穴が空いたような感じがするのも、事実だった。

私はゆっくりと腰を上げ、今後のことを考えながらスマホを開く。

するとミュチャの通知が来ていることに気づき、私はアプリを起動させる。

ミュチャのメッセージに一件新着があり、私はそれを開いた。

『七月三十日 サンシャイン北地下ライブハウス。クレイジークローラー、ライブします』

なんだ、バンドの悪質通知かと思いがらアプリを閉じようとした、その瞬間だった。

『君を、ポーカルに迎えたい』

この一文で、私の人生は何もかも狂わされた。

時は金なり。善は急げ。

そんな言葉を作った昔の人の顔を拝んでみたいものだ。

あれから私とクレイジークローラーは少しだけやりとりをした。

私の歌に興味を持った、ぜひバンドのポーカルをしてほしい、場所はここで午後五時に来てくれとのこと。あとは当日歌えと指定された歌の数々。

ポーカルをするかどうかは現地で決めると言っているのに、当日歌えと言ってくるのは如何なものなのか。少し文句を言っただけ。でも今日のために私は、少しおめかしをした。

メガネをやめてコンタクトをつけ、ちよつとだけ大人っぽい白黒ストライプのシャツワンピース。そして合わせるように履いた、リボンの特徴的な白色のサンダル。

電車で揺られて数分、私は都市部の駅にたどり着く。

そうしてマップを頼りにてくくと歩いた先に、見えた狭くて縦に長いビル。

「ここ、が」

そして地下に通ずる、長い階段。

天井から吊るされる電球はオレンジ色で、ぼんやりと灯る明かりは異世界へ連れて行かれるのではないかという雰囲気だった。

私の顔に似つかないヒール音をたてながら黒い階段を降りると、鉄で出来た重厚そうな扉があり、軋むような音と一緒に私は押し進む。

中には黒い床と黒い壁。そしてその目の前には床と同じ長さのステージがあり、ステージの両サイドにギターにつながる真四角なアンプが置かれていた。そしてちょうど中央にドラムがあり、その正面には私が主役だと言わんばかりの迫力でスタンドマイクがひとつ立っていた。

「あら、まだ集合時間十分前なのに」

初めてのライブハウスの雰囲気には圧巻されていると、扉の真横に立っていたショートヘアの青いマキシ丈ワンピースを着たお姉さんが私に対して微笑む。

「あのっ、かわいいじい、くろーらの」

「そうよ。私はドラムの楠雫。みんなからは、雫姉さんって呼ばれてるの。よろしくね」

ぱちんと音と星が舞うような雫さんのウインクに、私はぺこぺことお辞儀をした。

「はっはい、えっと、他の皆さんはどこに？ 挨拶をしたいんです、が」

「あー行儀が良い子ね、いいわ、こっち」

すべすべの手が私に絡み、雫さんに手を繋がれる。なんだかソワソワしながら引つ張られて先に進むと、控室だと思われる部屋に入った。

「はいはい、ボーカルちゃん来たわよ！」

ガヤガヤと他のバンドと思われる人たちもひしめく中、雫さんはごめんなさいねと言いながら人混みをかき分けて、一番奥の鏡の前でヤンキー座りする男二人の元へ私を連れていった。

「あんたら、なんでこんな隅っこにいのよ。はいはい、ボーカルちゃんよ」

雫さんはハイヒールを鳴らしてその男たちに近づき、彼らの背中をムチを打つように叩く。

「いってえ！ カッコつけて何が悪いんだよ、雫！」

「雫マジで、痛いんだよお前の平手打ち」

「はいはい、自己紹介自己紹介！」

雫さんに諭され、私と彼らは向かい合った。

「初めまして、俺はベースの星月亮。気軽に名前前で呼んでくれ。よろしく」

にこにこ微笑む好青年は、髪の毛は金色で髪型はマッシュ、ぱっちりとした目に薄い唇が印象的だ。背丈は百八十あるかないか。隣の男の人と変わらないぐらいだ。

そして隣の彼は、だるそうに話し始める。

「柘祐也、ギター」

柘祐也と名乗った彼は、ワックスでウニのようにつんつんに伸ばした赤髪が印象的だった。いやそれだけじゃない、見下ろす目は亮さんよりも大きくて、ほんのりと緑っぽい。

まるで外国人が混じっているような目元から目を離さず、私は彼に問う。

「あの、私をスカウトしたのはだれですか？」

「あー、それはね」

「俺だ」

赤髪の彼が、ぼんと私の肩に手を添えた。

「俺だよ。モモ」

そう言つて、祐也さんは歯を見せつけるように笑つた。笑顔の似合わない男だと思つたと同時に、低い重低音が壁越しに隣から聞こえ始める。

「おー、はじまつたか」

はじまつた、という言葉に私はなるほどと頷いた。きつと最初のバンドが演奏を始めたのだらう。

美しいビジュアル系っぽい歌声を耳にしながら、私は少し声を大きめにして彼に聞いた。

「私達の出番は？」

「トリだ」

「は？」

小首を傾げた私の反応に、彼は心底嬉しそうにケラケラ笑った。

「大トリだよ、モモ」

音、音、音。

音がひしめくライブハウスの中で、一番心拍数がうるさいのは私だろう。

私達の前のバンドは、いわばヘヴィメタルバンドであった。掠れた声で歌詞を叫び合ったと思いきや、何かのスイッチが入ったように美しい音色で歌い出す。そんなオンオフが軽やかな、ずっと聞いていたくなるバンドだった。

でも、そんなものよりも私の心のほうがうるさかった。

「とりあえず、袖で見てろ。後で呼ぶ」

後で呼ぶって？ そう聞こうとしても、彼らは振り返ることなく高身長を見せつけるかのよ

うにお客さんの方へとズカズカ歩いていく。

祐也さんはビリビリのズボンのポケットに手を突っ込んだまま、亮さんは両手をグーにして、隼さんは両手にドラムのバチを持って。

彼らが出ていき、お客さんたちの視界に入ると同時に、どんな演奏にも負けないくらいのラブコール声援が鼓膜を突き破る。女性の高い音、男性のドスの効いた音。

なによりもその中で、持ち場に座って試し弾きの音を溢す彼らが、一番輝きに満ちていた。

「みんな、今日は集まってくれてありがとう」

ひしめきお客さんたちに、祐也さんが投げかける。

「ここで俺達からのお知らせだ。バンドのボーカルだったハヤトが、辞めちまった」

えー、そんな、というお客さんからの悲鳴。私にはそんな要素も、今現在進行中のひどい手汗の要因に加わってしまう。

「だが泣くな！ 今日から新しくボーカルを迎えた」

舞台袖から、今だ行け、という他バンドの声が聞こえる。

「モモ！」

その声に押されるように、私は舞台袖からステージに飛び出た。

キラキラとした照明の下、まばゆい三人。そしてお客さんたちの顔色は、人それぞれであった。

「へえ、女の子なんだ！」

「えーなに、女じゃん」

「歌えんの？ めっちゃ素人そう」

「可愛い子だなあ！ いーじゃん」

いろんな言葉が飛び交う中、私はうるさいビートを刻む心臓を抑えるために服の太もも部分を握りしめて呼吸を整える。

「引き抜いたのは俺だ。まあちょっと聞き苦しいところもあるかもしれないが、気にせず聞いてくれ」

聞き苦しいという言葉にイラツとして、思わず祐也さんの方を向いた。

気分を害した私の眉間にシワが寄っていたのか、彼は自身のおでこをちよんちよんと二回人差し指で触ったと同時に、ギターをかき鳴らした。

うるさいぐらいに轟く前奏とともに、心臓の音だつてうるさく共演を刻んでくる。嗚呼、癩だ。だんだん腹が立つてきた。

親が死んで間もないのに、どうして私はここに立っているんだろう。祐也という男を、クレイジークローラーをろくに知りもしないのに、なんでここに来たんだろう。

むしゃくしゃしながら、私は指定された曲を思い出し、手汗を染み込ませるようにマイクを

両手でにぎりこむ。

「lock-on」

見慣れた世界 当たり前の世界 苦しい世界 怖い世界  
だけどそんなの もう飽きた 私の国境はもうないんだ  
淀んだ景色 暗い景色 沈んだ景色 悲しい景色  
跨いで 走って 蹴飛ばして 塗り替えて

愛する気持ちにハードルはない 恋する気持ちにプライドはない  
それでいいだろう そうだろう？ 未来はいつだって明るいんだ  
しあわせな気持ちにふしあわせはない 楽しい思いにつまんないなんてない！

やりたいことなんて 誰も止めれない！

さあ 君の世界を 教えて！

マイク越しに聞こえる、自分のクリアな音。

私の地声よりも少し高く、凛としていて、私が大好きな歌声。私が唯一人に誇れる自分の歌声が、ライブハウス中に轟いている。

一番を終えて、お客さんの顔をちらりと見た。

彼らの表情は、鬼気迫ったものを感じた。それは決して、悪い意味ではない。

彼らは、興奮していた。私の歌を聞いて、たしかに興奮していた。

隠せない興奮を隠そうとしないその姿に、私は三人を見回す。

三人も三人で、口角を上げて演奏をしていた。

「なんだ、歌うめーじゃん！」

「サイコー！ モモ！」

「もつと聞かせてええ！」

ギヤアギヤアと早朝の鳥のように喚くファンのみんなが眩しくて、私は頬がつるぐらいに笑いがこぼれた。

持ち場の時間が終わって、私たちはステージを後にする。

私はあんな声量で歌ったのが生まれて初めてだったため、舞台袖に戻った瞬間生まれたての子鹿のようにかっくんと床になだれ込む。

「大成功、だったじゃねえか」

そんな私の両肩には、雫さんと祐也。亮さんはお水とパイプ椅子を持ってきてくれて、背もたれに溶け込むように私は身を任せた。

「うん、だいたいこう、だったねえ」

体じゅうから沸き立つ汗が気持ち悪いし、口にしょっぱい水が入ってくる。

でも、それよりも、私自身の興奮が勝っていた。

「っは、お前の顔、最高じゃねえか」

「ほんと？ ありがとう、祐也」

右手をうちわ代わりに仰ぎながら、ふうふうと息をしているのもつかの間、私はユーヤと呼び捨てにしてしまったことに気づき、背骨が冷え込む感覚を味わう。

「あの、いまのは、ちがう、その」

「おー？ あ、呼び捨て！」

私の焦った顔に、祐也さんはひらめいたように、上を向けた右の手のひらの上に、左のこぶしを置く。

「別にいいよ、ってか呼び捨てにしてくれ。そのほうが色々楽だし」

「ら、楽？」

「ほら、メンバー内でひとりだけさん付けはさ最高に浮くぜ？」

私が周囲を見回すと、みんな深く頷いているのが目に見えている。

「おいで。ようこそ、クレイジークローラーへ」

手を差し伸べてくれる祐也、亮さん、雫さんの笑顔のつられるように、私は久しぶりに人に對して笑いかけた。

「ありがと……ありがとっ！」

敬語癖は、抜けなさそう。

「未成年だったの!?」

年齢を聞かれ、十五だと答えたら全員に驚かれる。なんならライブハウスのスタッフさんも顎が外れるレベルであんぐりとしていた。

「ちや、ちゃんとご両親の許可は取ってるんでしょね?」

雫さんが心配そうに聞くも、私はあっけらかんと答える。

「大丈夫です。親ついこの間死んでるんで」

「は?」

「事故で、二人とも……でも、正直殴られたり、やけに厳しい親だったので、ほっとしてしまつて……」

さすがに不謹慎だったかと口をつぐむと、亮さんが優しく頭をなでてくれた。

「わかるよ、桃」

「あら、シンパシーかしら? 勘当ボーイ」

「勘当ボーイで、お前もそうだろう」

「やだ! 私は自分から出て行ってるから、勘当じゃないわ。まあ勘当同然なところはあるんだ

けど」

勘当の意味がよくわからず首をひねっていると、祐也がブフツと噴き出して笑いだす。

「なんで勘当の話になってんだよ、もとはといえど桃の保証人とかの話だろ！」

「ああ、そうだった。でも、つらいことがあったら頼れよ。一人はつらいからな」

よしよし、と頭をなでてくれる亮さんに父性と母性の両方を感じ、私はおいおいと泣き出してしまふ。

「パパ、ありがとうございますすううう」

「パパって、なんか嫌だなあ」

困ったように笑う亮さんに、パパ以外の呼び方を考えて私は一考する。

「じゃあ、亮さん？」

「うーん、桃がいいならそれでいいよ」

砂糖菓子のような優しさ。両親から味わったことのない、ぬくもり。私はますます泣けてきて、びえびえと奇妙な声を発しながら泣いていた。

「変な声」

「変って何！ 祐也がスカウトしたのに！」

「まあまあ、落ち着きなさい」

雫さんのたしなめに、私も祐也もさっと静かになる。雫さんには、この人に逆らってはいけないという謎のオーラを感じる。

「保証人云々とか、お給料の件は私が何とかしておくわ」

「ありがてえ、さすがうちのドラマー兼マネージャー！」

「マネージャーって、まあそうなんだけど」

雫さんは腰に手を当て鼻高々な表情を浮かべている。

「あれ、そういえば曲ってだれが書いてるんです？」

「敬語敬語」

敬語と言われてはつとすも、祐也は続けた。

「俺が書いてるよ」

祐也の誇らしげな顔に、私はあんぐりとしてしまう。

「そ、そうなの!? すごい！」

「祐也は俺らが結成した時からずっと作詞作曲をやってるんだ」

「そうそう、うちのバンドの合计数十曲を生み出したのは、祐也よ」

雫さんと亮さんの祐也への話を聞いて、私はますます祐也がすごい人間だということを実感する。

さっきの曲も、歌っていてとても楽しかった。心が高揚する気分というか、高まっていく気持ち止まらなかった。彼は、天才なのではないか。

「おいおい、そんな褒めるなって」

口に出していないのに顔に出ていたようで、こうなのかと言わんばかりに渾身のドヤ顔に私はちよっとだけイラっとする。

「その辺にして。今日はパーティーと行きましようよ」

「そうだな、せっかく新しいボールカーを迎え入れたんだ。寿司でも行こうか！」

「回るやつだけどね」

雫さんの声掛けにみんな賛同し、荷物をまとめて外に出る準備をし始める。

「ほらモモ、行こうぜ」

もたもたしている私をみんなが待つてくれるのがうれしくて、私は思わず笑みをこぼした。

「うん、行こう」

そのあとライブハウスのスタッフさんに挨拶して回り、各自楽器を持ってライブハウスを後にする。

夜も更けた繁華街を歩くのは新鮮で、私はなんだかそわそわしてしまう。

「すすすすすす……っ」と

亮さんが寿司と何回もつぶやきつつスマホとにらめっこしている。彼を先頭にして足を進めていると、某チェーン店である寿司屋が現れ、一同は歓喜する。

「寿司だ!」

「寿司ね!」

「こんな遅くでもやっててくれることに感謝だな」

もう時刻は九時半過ぎで、私はもしかしたら補導されるかもしれない。ドキドキしていると、雫さんが頭をなでってくれる。

「大丈夫。ちゃんとうちまで送り届けるし、なんかあったら私の家に泊まらせてあげるから」

「雫さん……」

「あらあら泣かないの。それに、あなた明日学校でしょう? 学生の本分は勉強よ」

誇らしげな顔をする雫さんに、私はおずおずと告げる。

「ごめんなさい、その、私、この間学校辞めた中卒の身でして……」

「あらっ学校辞めたちゃったの!」

「ごっごめんなさい、その、クラスメイトとあまり合わなくて」

「いいんじゃないあねえか? 合わないならサクッとやめて通信制に変えるのもいいぜ」

俺がそうしたからな、と言いつつ祐也は寿司屋さんに入っていく。

「そうだよ。まだ選択肢はある。さあ行こう、モモ」

亮さんが扉をあけておいてくれて、私は雫さんに背中を押され寿司屋に入る。

店に入ると、寿司屋独特の酢飯の香りが漂ってくる。寿司屋つてどうしてこうチェーン店もたくさんあるのにおいと一緒にいるのか。そんなことを思っていると、お店の人がこっちだよと広めの席を案内してくれる。

「六人掛けですけど、ギター、入りますか？」

「大丈夫そうっす！ あざっす！」

祐也のブイサインにお店の人がクスリとして去っていく。その後空腹ということもあって、私たちはすぐに店備え付けの壁掛けタブレット端末とにらめっこした。

「私卵食べたいわ」

「寿司なんだから魚介食おうぜ雫、俺エビ」

「じゃあ俺はまぐろ」

皆がこぞつて頼む中、どうしようどうしようと考えていると、祐也がこちらを見てくる。

「モモは？」

祐也のやさしさに、雫さんも亮さんも好きなものを食べなと言ってくれる。久しぶりの人のぬくもり、緊張して仕方がない。

「じゃあ、えっと」

舌足らずをかみしめつつ、私は少しはにかんだ。

「サーモン……」

ワサビ多めで、と追加するとワサビ食べれるの!? と皆驚嘆していた。

人生で初めて、終電で帰ってしまった。

家に着いたらもう即眠ってしまった、気が付いたら午前十時。

「なにこれ……」

そして、親戚のおばさんからの電話が数十件。

気持ちが悪いと思っていると、またも電話がかかってきて私は慌てて電話に出る。

「はい、桃です」

「おっそい！ 何回電話させんのよ一回で出なさいよ！ 愚図！」

「ご、めんなさい」

困惑しながら謝ると、まあいいわと少しだけ気分がよくなる。

「そんなことよりね、あなたの保証人がこのあたしに決まったから、即刻荷物をまとめて頂戴。午後六時に迎えに行くわ」

「え？」

話が、呑み込めない。

なんだ、迎えに行くとは。なんだ、保証人とは。

きつと未成年だから云々とかの決まりごとがあるのだろう。大人って複雑だ。

そんなまとまらないことをぐるぐる考えていると、おばさんの金切り声がより一層金属みを増してくる。

「いいから早く！ 時間無いのよ！ 六時だからね！」

時刻だけを念押しされ、私は呆然と立ち尽くす。

すでに切られた電話、なにも用意もする気のないこの体。

おばさんは、私のことが嫌いなのだ。

そして私も、おばさんの保証人になるぐらいなら、死んだほうがまし。

「たすけて」

住所とこの無機質な一言だけを、気付けば私はバンドのグループチャットに送信していた。

何もすることもなく午後六時になって、夕暮れ時に小太りな女はやってきた。

「荷物……まともでないじゃないの！」

どこからともなく合鍵を出してきて扉をこじ開けてきたのだ。抵抗するすべもない。

「ああもうこの女は誰に似たらこんなに愚図になるの!? 母親!? そうよね、愛しの弟を奪ったあの女よね！」

なにも用意もしていない部屋全体を見回した後、おばさんは持ってきたスーパーのしわしわビニール袋にガラスや陶器も関係なしにいろんなものを捨てるように入れていく。

「はあもう顔まで似てきて、醜いつたらありやしない」

私の顔をちらつと見た後、おばさんはいつものように悪態をつく。

おばさんはいつもこうだ。私のことが嫌いなら、関わらなければいい。

私のことが嫌いなら、目に入れることもやめてしまえばいいのに。

「大体未成年だから大人しくついてきなさいよ、このぐ」

おばさんの小言は、私の後ろにさっそうと現れた三人によってかき消された。

「愚図はあんたよ」

雫さんの一言に、私は背後を見て満面の笑みをこぼしてしまふ。

「皆……！」

「だっ、誰よあんた！」

おばさんは慌てふためき、住居侵入罪だといひ始める。そんなことを言ったらおまえにもその罪が与えられるんだ、という言葉を私はぐっとこらえた。

「申し遅れました。私、黒瀬桃さんの保証人となりました楠雫です」

「はっ……保証人?！」

「はい。ですから、身の回りのものはすべてこちらに……」

「ふざけんじゃないわよ!」

おばさんがリビングの椅子を蹴り飛ばす。

「あたしがどれだけこの金のために頭下げたと思ってるの!? どれだけ争ったと思ってるの! 全部金のためとはいえ大変だったんだから! これからこいつの金で悠々自適にヌクヌク暮らそうと思つたのに、ああ邪魔つたらありやしない! そいつもこいつもあんたのせいよ! 愚

図!」

「モモは愚図じゃありませんよ。黒瀬桃です」

「んでこんな話の聞けない人が多いのかしら! いい、あたしは」

「おばさん」

キンキンと、金切り声がかましい。

「おばさんって呼ぶんじゃないって、あれほど」

「私、あなたの道具じゃない」

もう、黙ってほしい。

「私は、この人たちについていきます」

私は三人の顔を見回した。

「今までお世話になったぶんのお金はこの通帳に入っています、親族の皆様と仲良く分け合ってください」

胸ポケットから出した通帳をおばさんに渡すと、話の途中なのに金の額を数え始める。

「家は私とし……楠さんで責任をもって売り払います」

百万円！ という言葉を無視して、私は頭を下げた。

「お世話に……なりました」

通帳のお金では満足できなかったのか、おばさんは頭を左右に振って何か言おうとしてくる。

「まっ……」

だがそれも無視してビニール袋の中身を取ろうとしたとき、私は大きな影を頭上に感じた。

「この、ガキイ！」

直後に音が、響き渡る。

脂肪と脂肪が触れて床に転がり込み、頬がじんわりと鈍痛を浮かべていくのを、もといビントされたことをあたしは痛感した。

「あたしは、お前のためにッ」

「いーけないんだーいーけないんだー」

おばさんの口がヒートアップする中、祐也だけがにんまりとゴシップ速報のような笑みを浮かべてスマホでおばさんを連写している。

「写真撮ったから。桃をたたくとこ、それからさっきのヌクヌク発言も録音した」

「は!？」

「訴えてやる気なんだろうけど、訴えたらけーさつにこれ見せるわ」

「やめなさい！ 消しなさいよおおお！」

「とにかく」

もはやヒステリックを起こすおばさんに対し、三人は冷ややかな目を向けた。

「モモに、これ以上手エダすな」

それはすなわち、軽蔑を表すかのような、冷たい、目。

そのうつすらと漂う恐怖におびえたのか、おばさんは大声を上げ始める。

「ああああ！ もうわかったわよ！」

「ご理解の程感謝申し上げます」

「いい!? 絶対にこの通帳は使い切るからね！ 勝手にしなさいよ！ この裏切り者！」

のすのす音を立てて合鍵を私に投げつけて出ていくおばさんを見送ったのち、私は床にへたり込んでしまった。

「モモ！ 大丈夫!?!」

さっそうと駆け寄ってくれる雫さんに、私はふううと息をつく。

「つつかれ、たー……」

「そりゃあ疲れるよな。あんなの相手にしたら」

「というか、保証人って？」

「あっ、そうそう」

私の一言に、雫さんは思い出したといわんばかりに微笑む。

「私、モモの保証人になったわ。というわけで、これから私が親代わり」

「お母さん……ってこと？」

「ヤダもー泣かせるわね、この子」

やけにうれしそうな雫さんに、私首をひねった。

「とにかく。これからどこに住むかとか、お金の話とか、そういうのはまた今度にしましょ」

「はっ、はい」

これからよろしくねという微笑みに、私も深々と頭を下げる。

「よ、よろしくお願いします」

気にしないでと笑顔を浮かべる雫さんに対し、祐也と亮さんは腕を組み壁に寄りかかっていた。  
た。

「しっかし、急にモモから助けてって来たときはマジでビビったわ」

「本当にな。死んじゃうかと」

「ご、ごめんー!」

そのあと数週間は、このいじりが終わらなかった。

一時はどうなるかと思った、というのが本音だ。

昨日、みんなのグループチャットに助けを求めて正解だった。私だけでは、到底言いくるめ

ることなど不可能な人間だったであろう。

翌朝になった今でも反芻しほつと胸をなでおろす。私はそのあとさつさと身支度を済ませ、電車に乗ってライブハウスでリハーサルを共に行うみんなのもとへ向かった。

「電車、ちよつと億劫だな」

電車に乗るよりも、お金をためて都会に行きたい。そうすれば、歌ももつと歌えるし、みんなといれる時間も増える。

でもそのためには、やっぱりお金がいるんだよなあ。

「おばさん、お金返してくれないかなあ」

ないものねだりをしてもきりがない。目的の駅について電車を降り、私はライブハウスへ向かう。

「おはようございます」

初回は大成功だったとはいえ二回目もやはり緊張する。声が少し裏返ったが、みんな気にせずこちらに笑いかけてくれる。

「おはよ、モモ」

「おはよー」

亮さんと祐也が、ギターを取り出しながら声をかけてくれる。

「あれ、雫さんは？」

この場にはいない雫さんがどこにいるのか尋ねると、祐也がスマホを軽く確認しながら答える。

「んー、なんか遅れるって。理由は知らない」

「そっかあ」

祐也の言葉に適当に返事をして、声出しをする。今日のはど飴も持ってきたし、祐也が喉濡れスプレーヲ持ってきてきているはずだ。安心して声を出せる。

のども温まってきたとき、けたたましい音で私たちの控室に足音が轟いてくる。

「大変よ！ みんな！」

足音の主は雫さんで、息も切れ切れにし羽織ったブラウスも少しずり落ち気味だ。

「おー雫、おはよー」

「雫さん、おはようございます」

「おはよう、そうじゃないのよ、おはようじゃなくて」

「どうしたんだ、そんなに焦って」

亮さんが息を整えるのを手伝うべく雫さんの背中をさすっていると、雫さんはうつむきながらに私たちにスマートフォン画面をずっと見せてきた。

「私たちの動画が、異常なぐらいにバズってる……」

再生回数五十万のものが、たった数日で百万増。

こうやって皆で雫さんのスマホを囲んでいる間にも、再生回数は呼吸するように増えていく。

「何が起こってんだ……?」

祐也の訝しげな声に、私も息をのんだ。どうして急に再生回数がこんなに増えたのだろうか。どうして、どうして。

喜びよりも、いやな緊張のほう走っていた。

「見つけた」

亮さんがスマホの画面を見せてくる。そこには、数多の賞を総ナメしてきた赤髪で長髪のロックミュージシャンが、『今注目しているアーティスト』というタイトルの画面を前に足と腕を組み座っていた。

「これ……カケルじゃないか!!」

彼を見て嬉々とした祐也が雄たけびを上げ、勢いよく後ろに下がっていく。

「カケル……?」

「知らないのかモモ! 自分自身のヒットはもちろん、アイドルにロッカーにシンガーソングラ

イター、たくさんのミュージシャンをプロデュースしてヒットさせ世に送り出しているマジで敏腕で激強いミュージシャンだよ!」

どこかの辞書サイトのように話し興奮冷めやらぬ祐也に対し、亮さんはまあまあとたしなめる。

「落ち着け祐也、まだ動画見てないから」

「そ、そうだな、ちょっとまって、深呼吸させて」

祐也がおずおずと戻ってきて、亮さんは動画を再生する。

『いやーカケルさん! 昨日アップした動画がもう三百万再生突破って、すごいですね!』

カケルさんの前に立つ若いアナウンサーが、ゴマをすりながら問いかける。

『そんな。みんなのおかげだよ』

『いやいや謙遜しちゃって! ところで、最近カケルさんが注目しているアーティストって誰かいたりしますか?』

そんな質問に対し、カケルさんは顎に手を当て考えるしぐさを見せる。

『ん……クレイジークローラー、とか』

『くれないじー? すみません、存じ上げないのですが……』

『ああいや、今は無名の、ライブハウスで青春を謳歌するバンドさ』

『へええ、どうしてまた、無名のバンドに？』

アナウンサーの問いに対して、カケルさんははっと乾いた笑いを浮かべる。

『勢いを感じるんだ、最近のバンドには珍しい、闘志をむき出しにして戦うようなリズムが良くってね。演奏スキルも粗削りなところはあるが、並々ならぬものを感じる』

『へええ』

『特に、ポーカルの少女がすごいんだ。歳は十五だったかな、モモって子なんだけど、迫力があって、生命力の権化と言わんばかりの歌唱力、歌えばだれもが振り向くようなガッツと根性を感じさせる元気さ、なによりバラードの時の表現力がセンチメンタルかつ刹那的だね……あ、喋りすぎ？ ごめん、熱が入っちゃって』

『ほお……クレイジークローラー、か……』

『とにかく、皆きつと好きになる。近いうちに彼らは、超絶人気バンドにのし上がってくるだろうね。彼ら……特に、モモと共演するのが楽しみで仕方ないんだ』

『カケルさんがそこまで言うとは、そんなにすごいバンドなんですわ。では次のコーナー……』

「ここで動画は終わりか。いいところだけ切り抜かれてたな」

亮さんが息をつきながら、スマホをポケットにしまう。

「それで、そのせいで」

「雫落ち着け、呼吸を整えろ」

ゼーハーと息をつく雫さんの背中を、亮さんが背中をさすって落ち着かせる。

「ありがと、あのね」

息を整えて、言葉を吐く。

「これを見た企業様から、たくさんの電話がかかってきて」

「それ、案件ってやつか？」

「まあ、平たく言うところね」

雫さんが意味ありげな言葉をぼやくので、私たちは首をひねらせた。

「コマーシャル、番組、うまくいけば特集……そのほかにもいろんな場所から、私たちを呼ぶ声

が止まらないの」

「それまじ？」

「本当よ」

雫さんの言葉に、亮さんは嬉しそうにガッツポーズをする。私も何が起こっているのかわか

らなかったが、心の底からこのカケルさんという方に感謝した。

「祐也、さっきから何も言っていないけれど、あんたどうしたの」

雫さんの声で、祐也が動画を見てから何も感想を言っていないことに気づき、そちらの方向

を向く。

「雫、これ、本当の動画だよな？」

「本当の動画よ、何よどういう意味？」

祐也の変な言い回しに、雫さんは眉間にしわをよせる。

「俺、ずっとカケルの背中追いかけてて」

「そりゃあさつききのモモへの熱弁聞いたら、そういうのわかるわよね」

「俺、ついに報われたのか……？」

「そうだよ」

私はいつの間にか、声を出していた。

「大好きな人に認められるって、それだけですごいことだと思うの。祐也はすごい、すごいよ」

つたない言葉しか出てこない。高校生の語彙力では、彼のことをほめたぎるのは無理があるということなのか。

「モモ」

祐也は私の顔を見ると、涙を一筋流してしまう。

「ゆ、祐也!？」

倒れこむように床に力なく横たわる祐也の背中を、亮さんがそつとさすってやる。

「そうだよな、そうだよな。ありがとう、俺、報われたんだ」

「うん」

「親に音楽やめろって言われて、それでも続けて、やっとここまで来た」

祐也には、そんな過去があったのか。

自分がやりたいと思っっていることを親に否定されるつらさを、私は知っている。過酷さも、恐怖も。

「正直、今すぐにバンドやめてもいいかも……ってのは冗談だけど」

「ちょっとやめてよ、今背中に脂汗伝った」

私の正直な回答に、祐也はごめんといって笑う。

「さあさ、祐也も元気になってきたところで。なんの仕事から引き受けていく?」

隼さんはノートパソコンを立ち上げ、慣れた手つきでタイピングをしつつメールボックスを開いてみせる。

「いっぱいあるなあ、天才ミュージシャンの拡散力えっぐ」

「やっぱ音楽だろうなあ」

「そうだね、でもこのチョコレートのコマーシャルソングも気になる……」

「それもいいなあ、うわー仕事で迷うとか、昨日の俺が聞いたらびっくりするだろうなあ」

適度に茶々を入れながら、私たちは仕事を嘗め回すように漁った。

「はい、じゃあ本日はよろしくお願いします！」

その後、新商品コマージュシャルソングの納品などもあったが、私たちの日常は今まで通りに進んでいた。少しか秋が深まって冬が近づいてきたことも、おいしいパンケーキがある喫茶店が閉まってしまったのも、時の流れの生理現象以外は何も変化はなし。

ただ一点を除いて。

「ではクレイジークローラーの皆さんです！」

ライブハウスで演奏するときの、きゃあきゃあとした黄色が混じった歓声。

「モモー！」

「ユーター！」

やけに増えた声は、やはりカケルさんの効果なのだろう。抜群すぎるほどの、人、人、人の  
たまり場。

「出だしから、かましていくぞ」

祐也の低い声と反響するかのように沸き立つ、場内の音たち。

その日のライブも、大成功だった。

「いやーもう超絶大人気バンドですね！」

ライブスタッフの木内さんが、切れ長の目を光らせて私たちにアクエリアスを差し入れてくれる。

「ありがとうございます、アクエリアもゴチになります」

亮さんが返事をしながら、アクエリアスのキャップを外して一気に半分ほど飲み干す。

「なんだか軌道に乗ってきたよな。俺たちの活動」

タオルで汗まみれの髪をわしわしと拭く祐也が、満面の笑みで私たちに話しかける。

「雫は？」

「あいつはなんか誰かと話してる」

「そうか。でも本当に、ファンも増えてきたよな」

「来週からはもっと大きなライブハウスでライブできるみたいだし。やっぱカケル様だよな、効果果絶大」

確かにカケルさん効果はすごい。私が入った時よりもっと、いや倍以上ぐらいか、ファンや歓声が増えた気がする。あの評価動画から深夜のテレビにも徐々に出来るようになってきて、

私の資金問題も何とかかなりそうな勢いだった。

「まだ他の人に比べたら、雀の涙程度だけど」

「ん？ 何か言ったか」

「ううん、なんでも」

私が首を横に振っていると、携帯をバトンのように持った雫さんがハイヒールをけたたましく鳴らしてこちらに突進してきた。

「み、みんなああああああ！」

「うわ、どうしたんだ雫」

ドレスが破れんばかりの勢いで走ってきた彼女は、いつかのように呼吸を整える。

「ちょ、ちょーっつと聞いて」

彼女の右手に握りしめられていた形態は、破裂しそうなくらい強く握られていた。

「大手お菓子メーカーのCMに、全員で出ないかって」

その言葉を聞いた途端に、私たちの心も破裂しそうになった。

正直、撮影は緊張以外の何物でもなかった。

いやむしろ緊張することが仕事だったというか。楽屋が用意されていて、雫さんと亮さんがあいさつをして回っている中に私と祐也がきよろきよろしながら背後を回って。

そうして録音の時も、歌っている様子を撮影しているときも、なんだかどうすればいいのかわからず、私は支持されたことを必死に行った。

「チヨコレートとか生クリームじゃない、この醤油感！ 僕はこのバンドで間違いないって、動画を見た時から思ってたんだ！」

スーツを着た大人たちが盛り上がっている中に、大人組の二人が颯爽と割り込んでいって話に介入する。そんな姿を今日だけでも何十回と見た。

「すげえな、ふたりとも」

そんな休憩時間中、祐也と私はどこにいていいのかもわからなくなりただ壁のほうへと移動し縮こまっていた。

「大人だね。祐也とは違う」

「あ？ ……まあ、無理もねえな」

冗談めかしく言った言葉は祐也に届いたみたいで、ガンを飛ばされるもののため息をつかれる。

「俺は二十歳、隼は二十五歳、亮は二十七歳。そりゃあそうだ」

「え、そんなに年齢差があったの？」

「知らなかったか、そっか」

祐也は淡々と続けた。

「俺は元々ギターの弾き語り、亮と隼は別のバンドにいたんだ。二人がリーダーが解散したって言うって、でも音楽は続けたい。どうしようってさ、青い顔して話し合ってたんの。人柄も知らねーのに、俺はなぜか二人に声をかけてたんだよ」

「どうやって？」

「深刻な空気ぶち壊すみたいに割って入って。じゃあ俺がこの二人もらつていいか？ って、言うてやったんだ。そしたら話が進んで、今こんな感じ」

人生何があるかわかんねえよなと言いながら、祐也は二人に手を振った。

「あいつらは元々大学が一緒だったんだってさ。亮も隼も頭いい大学出てるの。俺は通信通いなからギターしてたから、自頭の良さも違う」

「そうなんだ……」

「まあ、嫌ではないよ。モモも高校行きなおせとは言えないけど、高卒認定はとっておいたほうがいいぜ。お前頭よさそうだし、すぐとれるだろ」

そんなことないよ、と訂正をしたところで、二人が駆け寄ってくる。

「はいはい、今日はお疲れさま。もう帰っていいって」

「雫、ありがとな」

「亮さんも、ありがとうございます」

いいんだよ、とさわやかに振舞う亮さんとは裏腹に、祐也はそれはそれは大きな欠伸をする。

「じゃあ俺は帰って寝るよ、ねみー」

「私も、帰るね」

帰るとは言ったものの、実家からこの撮影スタジオまで、およそ二時間以上はある。

正直、七時を回ると電車内は一気に疲れた空気で治安が悪い。眠ればいいは足なのだが、なんだか目が冴えてしまう。

ああ、億劫だ。

「大丈夫よ」

私が微笑みを隠せずに帰る支度をしていると、雫さんが肩を組んできた。

「そうよ、帰りましょう」

雫さんのにやりとした笑いに、私たちは首をかしげる。

「なんだよお前、家に連れ込む気か？」

「違うわよ、そんなんじゃないわ」

失礼ね、と雫さんは厄介そうな顔をする。

「モモの新しい家、契約したわよ。連れてってあげる」

#### 第四章 新天地

スタジオを出て車で十数分の、都内。

「ついたわよ」

閑静な住宅街に、私と雫さんはいた。

そして私たちの前に経っている、五階建てのマンション。

「今日からここが、モモの家」

実家は売り払えることになったし、何よりも雫さんが用意してくれた家。オートロックのなかったマンションのようで、私の新居の隣のアパートに雫さんは住んでいるらしい。夢しかない。

「お邪魔します」

「もうあなたの家よ」

玄関はぎりぎり人が二人立てそうな狭さ、そしてすぐ目の前にキッチン。冷蔵庫は備え付け、奥にお風呂スペース。

「洗濯機もついでる！」

「縦型だけどね」

リビングに入ると、仕切りのついた大きめの部屋が現れる。最低限の食器棚やテレビ、ベッ

ドなどはシックな雰囲気です統一されている。

「仕切りで部屋を区切れば二部屋になるわ。片方は飲食スペース、もう片方はベッドスペースとして使うっていうのが一番いいかもね」

「なるほど」

「お金の面も正直ギリギリだったけれど、まあ大丈夫かなーってところを選んだわ」

白っぽい壁紙にフローリング。きれいな部屋だ。

「どう？ 二部屋で、お風呂とトイレは別。洗濯機も脱衣所内におけるわ。ベランダはないけれど……」

おずおずと私に尋ねてきた雫さんに、私は満面の笑みで答える。

「素敵です！」

「貴女忙しそうだったから適当な条件聞いていい感じの部屋押さえたけど、本当にこの場所でも良かった？」

そういえばだいぶ前、雫さんに住みたい家の特徴を教えるというメッセージが来た。その時ちょうどゲームの周回をしていたから、風呂トイレ別とか最低限しか伝えていなかったけれど。

「はいっ、ありがとうございます！」

私の言葉に雫さんは安どしたのか、同じような笑顔になる。

「よかった。モモがそんなに喜んでくれて、私も嬉しい！」

会話が弾む。私の楽しさが雫さんにも伝染しているようだ。私としても、嬉しい。

「今日から住むってことはさすがにできないから、数週間以内にも今住んでいるところから荷物をもとめてここに移り住みましょう。できる限り早いほうがいいけれど」

「了解です！」

それにしてもきれいな家だ。築二十年は確実に経っていないだろう。こんなきれいな家に住んでも、良いのだろうか。

「ふふ、モモも本当に明るくなってきたわよね」

そんな私に、雫さんは優しく微笑みかけてくれる。

「そう、ですか？」

「ええ。なんか今までよりも格段に本音で話せてる気がするもの」

嬉しいわあ、と感嘆してくれる雫さんに、私は下を向いて思わず笑みをこぼしてしまう。

「そっか。そ、っか」

こんな私でも、一緒にいるだけで、誰かを喜ばせたり出来るのか。

笑わせたり、嬉しいって思わせたり、出来るのか。

「えへへ……」

なんだかうれしくって、にやにやとしてしまった。

「さて、今日はもう遅いし、うちに泊まっていきなさい。明日も練習とレコーディングが控えているんだから」

「はい」

私たちはそう言って部屋を後にし、真横の雫さんのアパートにお邪魔した。

「お邪魔します」

「それは当たってるわね」

雫さんの家はおしゃれな部屋だった。玄関には木の棒が刺さった芳香剤の香りが優しく充満していて、靴も二足ぐらいしか置いてない。

「さ、奥にどうぞ」

先に進む雫さんの後を追い、廊下を進む。

「廊下真ん中の右扉がトイレ、その左隣の扉がお風呂ね。で、奥の突き当りがリビング」

「おお」

リビングに入ると、キッチン付きの大きな部屋が現れる。左側のキッチンはカウンターになっていて、右を向くと扉が一つ。家具も白いアンティーク調で統一されていて、テレビにソファ、カウンターに添えられたバー風の二つの椅子。おしゃれな雰囲気は、年上の女性が住んでいる

という雰囲気がついたりなところだった。

「そっちの右は寝室。リビング、散らかっててごめんなさい」

「そんなことないです!」

散らかってなどいない。キャビネットの上一つの花瓶だって、その横に置かれた小物たちだってきちんと整頓されている。どのあたりが散らかっているというのだ。

今の私の部屋のベッドのほうか、よほど散らかっている。

「とりあえずご飯でも作るわ。何か食べたいもの……って言ったって、適当なものしかないけど」  
「適当なもので、十分ですよ」

私がそう言つて、手伝うとつづけると、悪いわねと雫さんは笑顔になる。

「じゃあ今日の朝炊いたご飯が余ってるからそれでチャーハンして、スープは豆腐が余ってるからそれに中華の素ぶち込んで、おかずは……」

「あ、じゃあおかず作るよ」

「本当? ありがとう。どんな食材でも、好きに使つていいからね」

「はい」

そう言うのと、私も雫さんも調理に取り掛かる。雫さんは器用な手つきでベーコンを切つて、卵を片手で割つて、ネギも刻んで。チャーハンを炒めながら、同時進行でスープを作っている。

二口コンロはどちらも埋まっているので、私は冷蔵庫の底にいた豆苗に手を伸ばす。

「隼さん、これ使っていい？」

「好きに使ってー」

私が生手に持っているものが豆苗ということを確認することもなく好きに使ってと言われたので、私は躊躇なく豆苗の根っこを切って器に入れレンジにかける。その間にツナ缶を一つ開けて、油は切らずにホカホカの豆苗にごま油とニンニクチューブとマヨを突っ込んで和える。もうそれだけでいいにおいがする。

「あらいいにおい」

「チャーハンには負けます」

そうこうしているうちに、すべての料理が完成した。

「できた！ さあ、食べましょ」

カウンターに並んだ料理たち。チャーハンは大皿に盛られて、小皿に取っていく仕組みだ。

「どれもおいしそう」

「そうね」

二人でバー風の椅子に座って、手を合わせる。

「いただきます」

ふわふわのチャーハンを口に含むと、卵の優しい味とベーコンのほのかに肉っぽい塩気が舌を刺激する。嘔むと、炊いて時間が経った米特有のもちっとした触感が私の口で遊び始める。

チャーハンに舌鼓をうっている、雫さんは豆苗を一口、はむりと口に入れる。

「うんま！ なにこれ、モモすごいわね！」

「へへ。豆苗の種は捨てずに取っておいたので、また水入れて生やしてください。でも、一回だけのほうがいいです。青みが強くなっちゃう」

「詳しいのねえ」

「それよりもチャーハンとスープもおいしいです！ いつも自炊してるんですか？」

「ええ。節約のためにね」

料理は楽しいわね、と言いながら、雫さんはまた豆苗をつまんだ。

「ふふ、これからは快適ライフが待ってるわね」

「はい。本当にありがとうございます、楽しい生活になりそう」

これからの新天地に胸を弾ませながら、私はズツと音を立ててスープを飲む。

「モモ、すごいわね」

「え、なにが？」

「知らない男に声かけられて来たのもそうだけど、一時間以上かけてこんな都心に来てるのも、

すこいわねって。電車とか、いやじゃない？」

電車と言われて、私はいつも時間をかけている横に長い乗り物を連想する。

「んん……人がいっぱいいるのは嫌だし、正直乗りたくはないけど、みんなに会うためとか、ラブのためって思えたらまだ楽、かな」

「そうなの」

雫さんは私の話を聞いて、うんうんと頷いてくれる。

「あ、でもこの間、声かけられた。初めて」

「え？」

あの日は確か、晴天で。

竹下通りでクレープを食べていたのだ。

「竹下通りでポールダンスしてる人、いないかなあ」

いるはずのない愉快な人を探していると、派手目なメイクの女の子に声をかけられた。

「あいつ、モモさんですよね」

突然声をかけられたことにより、食べていたクレープの生クリームが、変な方向に喉の奥に流れて行き、変な咳が出た。

「あ、あい、そうですけど」

めちやくちやにがさついた声でそう返すと、やっぱりー！ と歓声をあげられる。

「あの、この間のライブ、すっごい良かったです！ ファンになっちゃいました！」

「うえ、はい、あ、るがと」

ファンの子、か。前を向いて彼女のほうを向くと、歳は私と同年ぐらい、ロリータっぽい服にツインテール。最近はやりの地雷系女子だ。サンリオオキヤクターが似合いそうな雰囲気醸し出した赤いウサギのようなメイクで、彼女はきゃあきゃああと騒ぎ始めた。

「あつサインとかいいですか？ カバンの中にいつぞやのためにと取っておいた色紙とマッキーペンがあるので！ でそのあと、一緒に写真でも撮りませんか!？」

「う、うああ、あい、やりまそうう」

飲まれるようにサイン色紙を渡され、サインなんて考えてなかった私は、もうどうにでもなれと半ばむしゃくしゃした気持ちで、殴り書いた。

「これは……」

ハートを逆にして、それを黒く塗りつぶす。モモだから、桃を書いて、黒瀬だから、適当に

黒く塗りつぶした。

「すっごい！ センス高い！ かつこいー！」

「あ、はい、うん、えっと、ありがとう？」

赤子でも書けるようなそれは、彼女にとっては国宝のようだったみたいで、いたく気に入ってもらえた。

「じゃあ次は写真、あっどうせならプリクラとか行っちゃいませぬ!? って芸能人と一緒にさがにダメかあ」

「げ、芸能……」

「でもでも、お茶くらいなら大丈夫ですよ？ ね!?」

「あう、ちよつと声が、おおき……」

私は穏便かつ必死に彼女の声を抑えようとするも虚しく、きやあきやあと声の主は騒ぎ立てる。

「今芸能人とか言わなかったか？」

「誰かいるの？」

「だれだれ？」

まずい、彼女の声が大きすぎる。周囲の人が振り返り始めた。

それでもとどまることを知らないビツクボイスは竹下通り中に響いている気がして、私はもう思考がぐちゃぐちゃになっていく。

「ち、くしょ………」

かくなる、上は。

「あああ！ あつちに超絶イケメンと話題の鉄仮面が！」

「えっ、どこ!?」

彼女がミーハーな子だと信じた私は正解だった。私は彼女がそっぽを向いたと同時に、足を逆向きに素早く位置替えし、私はウサイン・ボルトもびつくりのスタートで竹下通りを駆けていった。

「あつ、モモさあーんー！」

彼女の声が遠くなっていく。すまん、足は速いほうだったんだ。

十分間ぐらいいは走っただろうか。

路地裏を抜けて息を整えつつ、片手に持ったまま忘れ去られていたクレープを一口に飲み込んだ。

「つ、つかれたあああ………」

私の声は、彼女の数割にも満たない蚊の鳴くような声だった。

「とまあ、こんなこともありました」

「こんなことじゃないわよ!! 超有名人みたいな感じになっちゃってるじゃない!」

「えへへ、どうしてだろう」

私にはかんでいると、もう! と雫さんが心配した顔でため息をつく。

「暴漢とかじゃなかったから良かったわ……次からは、ファンサービスもほどほどにしてくださいね」

「はい」

「じゃあ、お風呂でも入れてくるわ」

雫さんはよっこらしよ、と腰を上げる。

「雫さん」

「なーに? お風呂掃除手伝ってくれるの?」

そんな後ろ姿に、声をかけた。

「心配してくれて、ありがとう」

なんとなく、感謝を伝えたくて。

雫さんはいつも、私を心配してくれる。その心配が、私にはとてもうれしいのだ。

「やだもう」

「え？」

「ホントツットーに、あんたってかわいいわね！」

雫さんは、私の横に座って、私の頭をわしわしとまるで犬のように撫で散らかしてきた。

「わああ、雫さんお風呂掃除は？ 何かあるなら手伝うけど……」

「するする！ するけど待って！ あたまわしやわしやさせて！」

雫さんが私の頭を撫でまわしたのは、実に三十分以上であった。

第五章 きらめき

新天地に荷物を運びこんで、三週間がたった。

この町にもずいぶん慣れてきて、今では野良猫スポットの位置まで正確に人に教えられるぐらいになった。

「なかなか楽しそうじゃん」

ライブ後に控室の椅子に腰かけていた私にそう声をかけてきたのは、他でもない祐也だった。

私の前に椅子を持ってきて、どっかりと腰かける。

「うん。たまに雫さんの家に行ったり、雫さんが私の家に来たり。今はとても楽しいよ」

「そーか、よかったよかった」

水の入ったペットボトルを、口内に流し込む。一瞬で半分ほど減ったペットボトルを、べっこべっこ音を立ててへこませて遊ぶ。

「今日のライブも盛り上がってたな」

「そうだねえ」

祐也を見上げると、彼は汗を半袖シャツの袖口で拭いながら、にかつと笑った。

「俺、こんな時間が一生続いてほしいって、ライブの時よく思うんだ」

幸せってこういうことなんだなって、思うんだよと、祐也は続ける。

私もそうだねと頷いて、でも自分の胸に沸いた目標を口に出した。

「でも、私たちならまだやれるよ！ めざせ、武道館ー！」

祐也はその言葉を聞いて、少しだけ戸惑いを見せたのちに、うつむいて笑った。

「はは、そうだな」

「そうだ祐也、私、リズムを思いついたの。すっごく良いフレーズも」

「ん、どんな曲だ？」

「えっとね……」

一つの歌が、私たちの空間に響き渡った。

「いいな。その曲」

「でしょ？ えへ、いい感じだなって自分でも思う」

私が照れていると、祐也は壁に掛けられたギターを一つ、手に取って足に置く。

「ギター、合わせる。もっかい、聞かせて」

「……うん！」

優しいギターの導入で、私はもう一度歌いだす。

変わっていく 君に

僕は怖気づいてしまったんだ

これからのこと あしたのこと

もう過ぎ去った昨日のことだって

知りたがる君に

僕は ひるんでしまった

冷たいまなざし むけられそうで

どうせ変わるなら

僕も連れて行ってくれないか？

どんなところでもいい

どんな場所でもいい

どんな世界でも、いい

居場所なんて 君の隣にいくらでも あるから

「いい感じじゃないか？」

「ね、一曲書けそう！」

私が楽しくなって舞い上がっていると、祐也がギターを壁にかけなおしながら、ぼそりとつぶやく。

「モモがその気になったら、俺らなんて」

「ん？ どうしたの？」

「あ……なんでも、ないんだ」

「もう、どうしたのって」

「だいじょうぶ。全然そういうんじゃない」

和やかな空気に包まれていると、雫さんが扉から顔だけ、部屋内をのぞき込んでくる。

「二人ともー、今日はファン交流会があるの忘れてない？」

だめよ忘れちゃ、早く来てと雫さんは手招きしてくる。

「忘れてないさ、なーモモ」

「うん、全然！ 楽しみ！」

笑って控室を出て、エントランスで四人そろって大勢のファンの前で並ぶ。

「ええー、順番に並んでください、落ち着いてー」

スタッフの人の声に合わせるように、雫さんと亮さんがファンに向かって声をかける。

「みんな、一列どうぞ」

「そうそう、焦っちゃだめよー、そんなにしなくても私たちは逃げないわよ」

雫さんのジョークに会場が沸いて、私たちもなんだか楽しくなる。

「今日はありがとうございました」

そうしてファンのみんなにお礼を言う時間となった。並んでいるファンの一人一人に握手をして、数秒経ったら時間になってファンの子がはけていく。そんな仕組みだった。

「すっごく良かったです、あの、もう語りつくせないくらい、あ、えっと」

「お時間でーす」

「ああ……また来ますっ！」

私と握手を交わしたメガネの男の子が、惜しむように言葉を重ねるのを見て、私は笑顔でありがとうとつぶやいて手を振った。

「ふふ、ありがたいなあ」

「そうだな」

隣にいる祐也も楽しそうだ。実際に曲の感想が聞けて、楽しいのだろう。肯定的な意見は、人を前向きにする。

「今日は、あり……」

次のファンの子と握手を交わそうとしたとき、私は思わず固まってしまった。

「あの」

黒とチェックのワンピース、手首にシュシュ。靴は厚底、甘め。ウェーブのかかった黒髪ロングで髪型は違っても、目元のウサギメイクで分かってしまう。

「この間は、ごめんなさい！」

だいぶ前、竹下通りで遭遇したインパクト強めの女の子だ。雫さんにも話した、あの強い精神の女の子。

「モモ、知り合いか？」

「え、う、うーん？ うん、うん……」

知り合いといえれば知り合いになる。知らない人といえれば知らない人になる。どう反応すればいいのかと悩んでいると、もう聞くことはないと思っていたひとり喧騒が復活する。

「あの、本当に私場違いなことをしちやって、その、モモさんもプライベートがあるじゃないか！ ってあの後気づいて、だからウサイン・ボルトみたいな超スピードでどっか行っちゃったりしたんですよね！」

「や、あ、うーん？ え、っと」

「本当に申し訳ありませんでした。私、これからは」

「はい、時間でーす」

スタッフの人に連れていかれる彼女であつたが、これだけは言わせてくれという信念のこもった眼でこつちを見てきた。

「もう正々堂々、お金を積みます！ アルバムめっちゃ買っちゃいますからねー！！ モモさあー！！」

雄たけびがライブハウス内に轟き、後ろにいたファンみんながドン引きしているのがわかる。凍り付いた空気をどうにか打破するために、私は前のめりになってできるだけ大きな声で伝えた。

「あ、あの、無理はなさらないで……」

「お前はアイドルか」

祐也の間髪入れず繰り出されたツツコミに、冷めた空気は一変してどつと大爆笑が起こった。中でも雫さんはおなかを抱えて笑い転げていて、普段あまり大笑いしない亮さんも壁のほうを向いて肩を上下させ笑いをこらえていた。

「今の子!? モモの追っかけした子! やっぱ、超絶面白いじゃない!」

「ね、ガッツが違ったよ」

「ふ、ふたりまで……」

私が困惑していると、雫さんは深呼吸して背筋を整える。

「あーあ、いいもん見れたわ。はい、次の人、カモン!」

雫さんの掛け声に、会場でのファン交流会は何事もなく円滑に終わっていった。

本日、快晴。

最高の、レコーディング日和だ。

「でも、雫さんは遅れる……っ」と

遅れてしまう連絡がさつき来て、私は駅前で待ちぼうけ。雫さんの車を待っている。

「秋が近いなあ、さむ」

夏物のワンピースはもう寒いかな。衣替えをしなきゃいけないかもしれない。そうだ。今日の晩御飯は何にしようかな。

そんなことを考えていると、雫さんの愛車である白レクサスが私の前で止まった。

「ごめんなさい、遅れちゃって」

「ううん、いいの」

「今度何かおごるわ。さて、レコーディングスタジオに行きましようか」

「うん！」

ラベンダー風の社内芳香剤が漂う助手席に座ると、車は動き出す。

「車持ってたんですね」

「ええ。維持費はかかるけれど、思ってるよりも快適。いろんなところに行けるし、遠くのほうだつて行ける」

「いいなあ」

「モモ、車持つの？」

雫さんの問いかけに対し、私は天を仰ぐように空を見た。

「んん……どうかな。維持費がかかるならいいかなあつて思っちゃう。正直免許もとるか取らないかわからないかな」

青くてきれいな空を見ながら、私は告げた。

「免許は持つていいと思うわよ。でも今はマイナンバーカードがあるか……」

「作ってないなあ、マイナンバー」

「じゃあ持つておきな。いろんなところで役に立つから。車校は大変かもだけど」

車校かあ、とつぶやきながら、その後も雑談に花が咲く。

雫さんはどうやら運転するときに、結構よくしゃべるみたい。たわいもない話がじゃんじやかでてくる。

「それで……あ、ついちゃった」

話しているとおつという間にスタジオについて、私たちは中に入る。待っていてくれたスタツフの人々に挨拶をし、ヘッドフォンをつけてさっそくレコーディング室に足を踏み入れた。

「リラックスよ、息を吸って吐く」

扉を閉める前にそう雫さんに声をかけられ、私はヘッドフォンに両手を添えながら笑顔で鎮

く。  
「はい」

時間よ とまれ

ちぎれて ほどけて うごけない

さいなまれた 屈辱よ

培われた努力を 捨てないで

甦れ

自由が怖い？

争いが怖い？

生きることが怖がるな 失敗を恐れるな

普通を 恐れろ

あなたは　あなたこそが　未来

「いやはや、実に素晴らしい！　マーベラス！」

私のレコーディングを終えて、大きな音を立てて拍手をする男性が現れる。黒のキャップを深めにかぶりサングラスを着用、パーカーにジーンズを履く姿はさながら不審者のようだった。

「誰？　ここは関係者以外立ち入り禁止のはずよ」

雫さんがヒールを鳴らしながら、脅迫するような怖い顔をして男性に近寄る。

「ダメダメ、そんな怖い顔をしないで。僕は彼女をプロデュースしたいんだ」

「な……」

雫さんをそつと押しわけ、男性は私のいるレコーディング室に入ってくる。

「しびれたよ、モモ」

それだけ言って笑う男に、私は恐怖心を覚える。

「だ、れですか……？」

両手で持つヘッドフォンがつぶれそうなくらいに力を込めていると、そんなに力んじやだめだよとたしなめられる。

「そこまで警戒するなら、きちんと名乗ったほうがいいな」

そういうと、男は帽子を取り、サングラスを外した。

「あなた、は」

雫さんが驚くのも、無理はない。

私の前に立っている長身の男は、赤髪の長髪で、切れ長の目がアンニュイな雰囲気を出している。す男。

「初めまして、カケルです。君をプロデュースさせてくれ」

伝説のミュージシャン、カケルだった。

## 第六章 狼煙

「カケル、さん……？」

私は驚き、その場に突っ立ったまま体を動かすことができなかった。

それもそうだろう。すらりと伸びた長い脚、それと同じように長い腕、指。私を容易に見下ろす百九十センチ代の背丈。どこを切り取っても「イケメン」で、彼が齡四十を超えているとは思えないほどのスタイルだった。

「ああごめんね、ちょっと出ておいで」

「は、はい」

いわゆるがままにレコーディングをしていた部屋から出て、私はカケルさんの前に小走りに向かい立つ。

「ありがとう、モモ。君の歌を聞かせてもらったよ」

「い、いえ、その、私のほうこそ」

「ああやめてくれ、お礼を返されるほどの人間じゃない」

そんな謙虚なところが人をひきつけてやまないんだなと思い、私は黙って頷くことしかでき

なかった。

「それでさっきも言った通りなんだけど、君をプロデューズさせてほしいんだ」

「ぷ、ぷろでゆうす」

「そう」

聞きなれていない言葉に、私は戸惑いながらも復唱する。

「ちょっと待っててください、プロデューズって、モモはうちのバンドのボーカルで」

「そうだね。もちろん無理な兼任などはさせないさ」

安心してくれ、とにっこり微笑まれている、太刀打ちできない。というか、イケメンにここまですぐ優しくされたことがなくて、私は戸惑ってしまう。

「僕はあくまで君の可能性を伸ばしたいだけなんだ。モモ」

カケルさんは、手を差し伸べてくる。

「どうか、僕とトップ街道を駆け上がってくれないか」

嗚呼、この人は。

私が、「必ず、トップになる」というのを見越している。

私はそんな技量じゃない、とも言えない。

「お願い、します」

私は、自分を試してみたい。

そう思つて、彼と握手を交わした。

そうこうしているうちに、歌のレッスンが始まった。

「もう少し、のどじゃなくつておなかからを意識してみて」

「はっ、はい！」

歌のレッスンの先生は優しいふくよかなマダムで、私はレッスンを心から楽しんでいた。

「そうねえ、試しに何も意識せず、あー……つて、出してみてごらん？」

「ああああああ……」

「芯がなくてしなな感がでちゃうでしょ。おなかから声を出すのは、とっても大事なことよ。悲しい歌とか、か細い感じならあえてのどからでもいいけれど、おすすめはしない」

「はいっ、頑張ります！」

「うんうん、元気でよろしい！ 桃ちゃんはガッツがあるから、きっと大丈夫。強くいきましよう！」

「はい！」

本当にこの人はやる気の引き出し方が上手だ。うれしいことをたくさん並べてくれる。

「やあ、順調？」

おなかを意識していると、レッスンスルームの扉が開いて、高身長イケメンがこちらをのぞいてくる。

「カケルさん！ 頑張ってます！」

「桃ちゃん順調ですよー、この調子でいけばもつともつと歌がうまくなっていますね」

一人でカケルさんに報告すると、彼はそうかそうかと言ってにここにことほほ笑む。

「モモの歌声に磨きがかかっているようですね。引き続き、よろしくお願いします」

「はい、ピシバシシこいってきますね！」

ピシバシという言葉の裏になにか鞭のようなものを感じ、私の肩は軽くすくんだ。

「じゃあ、僕はこれで」

「ありがとうございます」

「お気をつけて！ お仕事頑張ってください」

先生の声に一礼した後、カケルさんは颯爽と部屋から立ち去って行ってしまふ。残された私たちはレッスンをするため、再びさっきの立ち位置に戻る。

「あの、先生はいつからカケルさんと知り合いだったんですか？」

私はレッスンをする前に、先生にそう問いかけてみた。

「うん？　　んん、あの子がデビューする前からかしら」

「えっ、そんなに！」

「私が若いころにねー、ボイトレ教室の講師のアシスタントをしていた時に、彼はやってきたの。小さい頃だったわね。小学生のとき、今よりもうんと小さかった」

あのキリンのような背丈のカケルさんからは想像できないが、彼にもそんな幼少期があったということなんだろう。

「カケルくんの歌を聞いたときに、当時の講師も私もビビッときたわ。この子は売れる！　天才アーティストだ！　って」

「そ、そんなに」

「ええ。だから講師は、そんな彼に対して異常に厳しく接したの」

天才を見つけておいて厳しく接するというのがよくわからなくて、私は首をひねってしま

う。  
「どうして？　　って顔してるわね。きっと期待していたのでしよう。カケル君の才能に」

「期待……」

「でもあまりに厳しかったせいで、カケルくんはうちのボイトレ教室に来なくなつたわ。もう嫌だ、怖いって。だから私が独立して、まずは彼の歌いたい気持ちを大切に持つように話したの」  
「気持ちが大事、とはよく聞きます」

「そういうこと。そうしてカケルくんはプロになって、売れて、お仕事いっぱいもらつて、今に至るの。今でもこうして自分のプロデュースしたいと思つた時には事務所に連れてきて、掃除のおばちゃんしてる私に話しかけてくるの。」「その三角巾をとつて、今すぐこの子に歌を教えてください！」 つて」

「さ、さんかくきん」

「私は音楽を教えるとき以外は基本的に暇よ。それに彼が連れてきた子はみんなどんどんうまくなつていくもんだから、早々にデビューして巣立つていくの。で、事務所でぐうたらしているのも仕方ないからつて、掃除のおばちゃんしてるわけ」

先生の意外な一面とカケルさんの悲しい過去を聞けて、なんだか私は圧倒された。二人三脚、とはきつとこのことを言うんだろう。ビジネスパートナーという感じがして新鮮だ。

「さ、お話タイムは終わり。のども温まつてるでしょ？」

「はっ、はい！」

「良い返事！ いくわよ！」

その後も、愛あるしごきは続いた。

歌のレッスンの基礎がある程度終わって、数か月。

カケルさんは私に、アルバムを発売するよう要請した。私も答えるように、様々な曲に命を吹き込んだ。失恋ソング、恋愛、ポップス、英語の曲。

カケルさんの腕は凄い。どんなことでもこの人なら可能にしてしまうような雰囲気を感じる。故に今だって、アルバムが発売されてまだほんの一週間ほどしか経っていないのに、次の曲についての話し合いを進めているような状況だ。

「モモ。この曲とこの曲。それから、この曲に歌を入れよう」

私はバンドでの仕事の合間を縫って、カケルさんとちよくちよく会ってやり取りをしていた。一昨日は喫茶店、その前はカケルさんの事務所の一角、今日はレッスン室で。

「わかりました。このデータを聞いて耳に入れたのちにレコーディング、って形で良いんですね」

「そう。モモって本当に呑み込みが早いよね。ありがたい」

「そんなことないですよ」

「ふふ……そうだモモ、バンドのほうはどう？」

カケルさんの質問に、私は待つてましたと言わんばかりの笑顔を向ける。

「実はバンドのほうも好調で……見てください！」

私はカケルさんに、意気揚々と動画配信サービスの画面を見せる。

「この曲、祐也が作ったんです。MVの指示は亮さんが作ってくれて……祐也もすごいけど、亮さんも実はすごいんですよ」

「りよう？ このベースを弾いているイケメンかな？」

「そ、そう！ このうねうねしたカメラワーク、この曲にあつてると思いません!？」

バンドメンバーが褒められたことがうれしくて、私は思わず熱くなってしまう。

「うん……確かに、これは凄いな。いくら失恋の曲だからって、こんなに情緒不安定にカメラが動き続けるのは実際問題ナンセンスに近い……でもこの曲だからこそ機敏な動きのカメラがいい味を出している……」

ぶつぶつと独り言を続けるカケルさんに、私はなんだかうれしくなってしまう。

『ここ、もう少しぐちゃぐちゃって動いてもらえますか？』

『んん……カメラを上からワイヤーで吊るすか』

あの撮影の日、私が発声をしている間に亮さんはあれこれ考えて、腕を組んで首をひねっていたようだった。

最終的に出した結論が、

『俺のスマホ、ワイヤーで吊るしてください。で、ぶん回してください。解像度が低いほうが、クッソ荒れ狂った失恋ソングに合いそうだ』

っていう状況だったのは、ちよつと場の全員がビビったけれど。

「モモ？ モモ？」

「んあ、ごめんなさい、ぼーっとしてた」

カケルさんの声で我に返って、私は頭を左右に振る。

「大丈夫です……ふふ」

私は亮さんのシニールな挙動を思い出して、少しだけ吹き出す。

「どうしたんだい。さつきから笑顔があふれてるじゃないか」

「んん……実は、この撮影方法、なんだと思います？」

「ん〜？ なんだろうなあ……あ」

カケルさんとクイズ大会でもしようと思ったのに、その問答は彼のスマホのコールでももの数秒、あっけなく幕を閉じてしまう。

「すまない、電話に出てくるね」

「はい」

ちよっとしゅんとしながら、カケルさんの電話する姿を確認する。なにか楽しそうにしゃべっている雰囲気。

あれ、口角が一瞬下がった。

「本当ですか！」

あ、上がった。

「はい、はい！ありがとうございます。うれしいです！」

ますます上がった。口角が天井に突き刺さりそう。

「はい！では本人にもそう伝えます、本当にありがとうございます。失礼します！」

電話を切ったカケルさんが、すぐにこちらのほうを向いてダッシュで私の手を握り締めてくる。

「んな、カケルさん!？」

意外にも冷たくて、ひんやりとしているカケルさんの手にびっくりしている私とは裏腹に、カケルさんの笑顔はとどまることを知らない。

「モモ、ニュースだ」

「アリーナライブが決まったよ」

アリーナライブの手続きや、流れを説明されているとき。

私のスマートフォンに、一つの留守電が入った。

『モモ？ 雫よ。大至急こっちに来て！』

『クレイジークローラー、武道館ライブが決まったの！』

第七章 絶頂

武道館ライブ当日。

もう勢いが止まらない私たちだったが、どんな案件のお仕事よりもこの仕事があったといえる。

やっぱり、ライブが一番楽しいんだ。

「よっしゃいくぞ！」

「うおおおおおおお!!」

雄たけびもすごくつて、でも、私は興奮で、正直よく覚えていない。

「武道館……来ちゃったぞー！」

私の雄叫びと共に、ファンのみんなは一斉に声を上げる。

「じゃあまず、俺達の思いを込めた「ラプラス」聞いてくれ」

『ラプラス』

子供の頃 知りたかったことは  
案外残酷で

僕の心は くすんでいつて  
鎖で 繋がれてる

寂しさ 押し殺してみても

なんにも変わらない

どうしてなの

僕はただ

知りたいことがあつただけなのに

I can't be free

自由になりたい

この枷 解いて  
誰か聞いて

Where is freedom?

自由が欲しい

それだけなのに

ただ それだけ なのに

絶頂。

まさにこの言葉が似合うだろう。

舞台の上で、私たちは、はっちゃけた。

記憶も、おぼろなぐらい。

もっとやれ！

かっこいい！

さいこう！

ファンでよかった！

たのしいぞおお！

こんな楽しいライブ初めて！

モモ、歌やっべえ！

リヨウのベースも決まってる！

シズクのドラムもいつもより熱いぜ！

ユーヤの作った歌、かっけえよ！

「わたしも、たのしい、よお—————!!」

「今日はお疲れ様でした！」

「「「ありがとうございます！」」」

声を揃えて、スタッフさんに頭を下げる。額から溢れる汗は全員が全員止まらなくて、興奮を表すのにひとものだった。

「モモ、今日が一番良かったよ」

「ほんと？」

「そんなないじわるなこと言わないの！ モモはいつまでも一番よ」

「隼さんイケメン……」

「ちょっと、私にイケメンなんて言葉は似合わないわよ」

談笑していると、後ろから凜々しい革靴の音が聞こえてくる。

「ブラボー、素晴らしかったよ」

優しい笑顔で微笑んでくれたのは、他でもない第三の親、カケルさんだった。第二の母は隼さん。

「カケルさん、来てくれてたんですか？」

「もちろん。モモの武道館での荒々しい歌、僕との共演とはまた違った魅力を感じた。君は天才だ」

「そつ、そんなことないです！」

「ハハ、やすやすと褒め言葉は受け取らないスタンス、嫌いじゃない」

私とカケルさんが盛り上がっていると、赤髪がゆらりと揺れた。

「カケル、さん」

「ん？ 君は」

「俺、クレイジークローラーの祐也って言います」

「ああ、モモから色々聞いてるよ」

「あっ、あざっす！」

ぎこちない感じで会話を進めていこうとする祐也とは裏腹に、なんとなく冷めたような雰囲気に対応するカケルさん。二人の温度差を感じて、私は間に入ろうとする。

「か、カケルさん、彼のギターテクニクも凄くって。ほら、武道館でもギターソロの時はファンのみんなが沸き立つぐらい」

「んー？ 僕はモモが歌い始めたときのほうが沸き立ったように感じたよ」

カケルさんの言葉に、祐也は顔色がどんどん悪くなっていく。

「な」

それは、憧れの人に半ば見捨てられたような言葉をかけられた、虚しいようで、苦しいような顔色だった。

「カケルさん！」

私はいてもたつてもいられなくなって、カケルさんの服の袖を掴む。

「おっと、モモ。茹で上がったような赤い顔で、どうしたんだい？」

「ちよっと、こっち来てください」

服を掴んだまま、私は適当に空いている部屋になだれ込み、カケルさんに今までしたことのないようなキツとした目で話す。

「なんざいモモ、そんな怒った顔しないで」

「今のは言い過ぎだと思えます」

カケルさんの言葉をあえて塞いで、私は続ける。

「祐也にとつて、カケルさんは憧れなんですよ。同じギター仲間としても、音楽を志したものとしても。あなたが私達のバンドを褒め称えたときも、祐也は床に倒れ込むようにして泣いて喜んでたの」

私の話を、カケルさんはただ黙って真面目な顔で聞いていた。

「そんな祐也にあの言葉は無いです。ダメ。」

緊張感を纏った空気が、ちくちくと肌に刺さる。

「モモ」

カケルさんは表情一つ変えることなく、私の名前を呼んだ。

「僕はね、決していじわるでああやって対応したわけじゃあないんだよ」

「えっ？」

「僕は彼に、強くなってほしいんだ」

強く、と私が復唱すると、カケルさんは小さくうなずく。

「きつと彼にはこれから、いろんな荒波が訪れる。僕は、ここでほめすぎではいけないと思ったんだよ。おせっかいかもしれないし、彼は望んでいないかもしれない。けれど、今の彼が今後売れていって、バンドだけではなく彼自身として成長してほしいんだ。だからあえて厳しい言葉をかけた」

カケルさんは優しい顔をして、私にそう続けた。

「正直、今の彼には今後のクレイジークローラーを支えていけるほどのリーダーシップや主体性は感じない。仕事、ではなく楽しいを先に見据えて動いている。無論それも大切だよ。素敵なことさ。でもね、それだけじゃバンドは解散してしまう」

「解散……」

「熱意が足りないって言いたいわけじゃないんだけど、もう少し、執念のような、マジなギター演奏を、聞きたいね。彼ならそれができるから」

カケルさんの目は、さつきとは打って変わってきらきらと光り輝いていた。

この目、知ってる。私はそう思い返し、まなざしを思い返す。あの日、私と出会って、プロデューサーになってくれた時。私のソロデビューが決まった時。大きな会場、それも武道館でライブすることが決まった時。

カケルさんは、祐也に、期待している。

私と同じように、いやそれ以上に、ギタリストとしても、バンドのリーダーとしても。

「さあ、戻ろう。みんなが心配してるだろうしね」

「はいー」

「ふふ、僕の釈明がモモに通じたみたいで、よかったよ。バンドのみんなで打ち上げでも行っておいで」

「へへ、ありがとうございます。じゃあ、戻りますね」

私はカケルさんに背中を押されて、みんなの元へ戻った。

「彼が耐えられるかどうかは、分からないけどね」

カケルさんの言葉を、聞くこともなく。

練習の前日、武道館後のカケルさんからの言葉を聞いて、絶望に打ちひしがれる祐也の姿がふとよぎった。

「祐也……」

寝る前にふっと思い出したから、なんだか不安になってしまう。練習、来てくれるかな。私のこと、嫌ってないかな。カケルさんのこと、どう思ってるんだろう。

なんとなしに寝れなくて、私はコンディション悪めの状態で練習のためのホールに足を運んだ。

でも、祐也は意外といつも通りに練習に来た。

「ごめん、やっぱ帰るわ。打ち上げは、また来週でもいいか？」

青い顔をしてはにかんで、そう残して帰ってしまったときはどうしたものかと思った。正直、やんでしまおうとか、メンタルにだいたい負担がかかっているんじゃないかとも思って、冷や汗が止まらなかった。

でも次の日にはいつも通り、本当に何事もなかったかのように練習に来たのだった。亮さんが大丈夫かと声をかけても、全然平気だの一点張り。

「俺、あれからかんがえたんだよ。多分、カケルさんのこと、ちゃんと見れてなかった。カケルさんの真意、わかったから」

途切れ途切れの言葉にも気持ちは何となくこもってはいて、そうかそうかと亮さんは頷いていた。

私も、正直懂れの人にあれだけの言葉を言われたらどうなってしまうかわからない。祐也の気持ちも、分からなくはない。今はそつと、ギターを弾くことを楽しんでもらうことだけに集中してもらいたい。亮さんも、同じ気持ちなんだろう。

ただ一人、雫さんを除いて。

「ねえ、今日の祐也、変じゃなかった？」

話があると言って私と亮さんをこっそり喫茶店に連れ出した雫さんは、アイスコーヒーにミルクを注ぐ。

「うーん、そうかな。あこがれの人に結構言われたんだろ？ そりゃああんな青い顔しても仕方ないというか」

「うんうん」

亮さんの言葉に頷きながらクリームソーダのアイスを一口、舌にのせる。きんと冷えが頭を刺激した後に、優しい甘さが伝わってくる。

美味しいなあと思っていると、雫さんは神妙な面持ちで私たちにこう続けた。

「そうじゃないのよ。ギター弾いてる時の手の動きが、おかしいのよ。昔から祐也の演奏を見て

も聞いてもいるからわかるんだけど、今日は異常だった。ミスはしないけど、ミスしかけているというか。手の動きが、奇怪で」

雫さんは、きつと私たちに「祐也が変」ということを具体的に伝えたいのだろう。なんせドラムは、みんなの状況がよく見える。でも言葉、言葉だ。どれを選んだらよいかわからないといったように、しどろもどろになりながら、最終的にはため息をついた。

「ごめんなさい。何て言ったら良いのかわからなくなっちゃって」

「いや、大丈夫。無理しなくていいよ」

亮さんは雫さんに優しい言葉をかけながら、ストレートのアイステイーに口つける。

「正直、演奏している間のことは俺にもわからない。もちろんモモも、歌っているときはいつも集中して前を見ているからな」

「ごめんなさい、周りを見たほうがいいのかな」

「ううん、逆に周囲を気にして歌ってる感じがして変じゃないか？ モモは今のままで大丈夫」

それと同時に喫茶店の看板メニューのスコーンがテーブルに届き、亮さんは私に食べなと勧められる。

「俺も、今日はいつも以上に声をかけたつもりだったんだが……正直、落ち込んでいるんだなあ  
としか思わなかったな」

「そうなの、会話はまあまだどうってことなかったんだけど、動きが変というか」

「さっきの演奏中の異変か？」

「そう。でも、亮がそこまで言うのなら、やっぱり私の思い違いだったのかしら……」

雫さんは頬杖をつきつつ、唇をとんがらせる。

「雫さんは、周りをしっかり観察できてて、すごい」

私は、なんとなしに思ったことを、こぼしてみた。

「ちょ、ちょっとモモ、急にどうしたのよ」

「だってすごいんだもの、みんなのことちゃんと見て、私の家にもよくパトロールしに来てくれるし」

「あれは暇なだけというか」

メロンクリームソーダが、しゅわしゅわはじける。

「私も、雫さんみたいになりたい！」

私は同じような目をしながら、雫さんを見つめた。

「あはは、モモ！ 何言ってるのよ！」

「そうだが、お前もタイに行くのか？」

「たい？」

タイ、たい、隊、鯛。どうしてその単語が出てくるのか分からず、私は首をひねる。

「知らなかったのか？ 雫は元々男だぞ」

おとこ、だんせい、ぱおん。

今まですぐそこにあつた単語がまるで知らない単語のように感じて、私はよくいる銀河系をさまよう虚無な女の顔になってしまふ。

「えっ！ ちょっとモモ、本気で私のこと生粋の女だと信じて疑つてなかったの!？」

「は、はい……」

「ヤダうれしいんだけど！ もー、あとでお小遣いあげちゃう」

スコーンを一口かじつて、雫さんは続けた。

「私は元々、男として生まれたわ。雫、っていうのはたまたま中性的な名前だっただけ」

いつもまっすぐ私を見てくれる目が、伏し目がちになる。

「ジェンダー問題に寛容になっているとはいえ、まだまだ認められていないことのほうが日本は多いのよ。私の家もそうだった」

「おうち?」

「母親も父親も、兄も弟もドン引きしていじめられてたわ。家では一番下っ端。でも、祖母がいる間は祖母の家に避難してた」

避難先があつてまだよかつたけど、と雫さんはつぶやく。

「祖母は優しくてね、あなたはあなたたつて言ってくれるような人だったわ。二十一の時にあの人が亡くなつて、遺産はすべて私のもとにという遺書の元、遺産をいただいたわ。それで大学にも通えたくらいの、額を」

「お金……」

「でも、こんな性別も不明瞭な人間に遺産が全部いったの、家族としては耐えられなかつたんでしようね。もう金はあるんだから、出て行けつてお葬式が終わつた日に着の身着のまま追い出されたわ」

着の身着のまま。私はその言葉を聞いたときに、背筋が凍るような異様な戦慄を感じた。

「そ、そのあとはどうなったの？」

「当時から亮は一人暮らししてたから、そこに転がり込んでね。家族がいない時間を見計らつて、次の日に実家に侵入して荷物を全部持つて逃げるように消えたの」

「逃げるように……」

「まあ正直家をいつか出ようと思つてはいたけど、こんなことになるとは思わなかつたわね。今はバンドしながら、細々いろんな事して過ごしてる」

楽しいわよ、なかなか。そういつて、雫さんは半分残つたスコーンを口の中に放り込んだ。

「いろんな事って？」

「株に仮想通貨……まあ博打ね」

「ギャンブル……？」

「モモ、こつからはこいつの話を鵜呑みにするなよ。こいつが豪運なだけだ」

「やだ。そんなこと言われたら止めとこうかしらね。それに未成年にこんな話、するものじゃないわ」

私の家の話もだけどね！　と言いつつ、雫さんは大声で笑い転げ始めた。

「モモ、さつきから顔が引いてるわよ。ひつどい家でしょ？」

「それも、そうだけど」

すこしだけ、視界がにじむ。

「私、雫さんの居場所を作っていなかった家族をひどいと思う」

「モモ……」

「だって家族なんだよ？　私もそうだけど、家族はだれか家族がづらい顔して帰って来た時に、黙って話を聞くくらいの努力はしなきゃいけないと思うの。自然とそれができればベストだけど、そうじゃない人もいる。でも、歩み寄る努力はしないと。だって」

「家族、だからな」

亮さんはそう言って、私の頭にポンと手を添えてくれた。

「じゃあ、俺にとってこのバンドは家族みたいなもんだな」

「えっ」

「違うのか？ つらいことあったときに黙って聞いてくれる祐也とか、きちんとアドバイスしてどうすればいいのかを一緒に考えてくれる雫、それで感情の共有をしてくれるモモ」

「いいやつしかいないじゃないか、と亮さんは続ける。

「俺にとっては、もう家族みたいな宝物だよ」

「りよ、りようさん」

「モモ、そんな鼻水たらしてどうしたんだ、かわいい顔が台無しだ」

テーブルの上に置かれた紙ナフキンを二つとって、私のぐじゅぐじゅになった顔を拭いてくれる。

「家族って思ってくれてて、ありがとお……」

「やだ、泣いちゃう」

もらい泣きした雫さんも、紙ナフキンを一つとって涙ぐむ。

「ゆうやも、きつとそうおもってるよね」

「そうよ。たぶんね」

「今どこにいるかもわかんないけどな！」

確かに今日、祐也は急用があるといつて練習後速やかに帰って行ってしまった。残された私  
たちで、こうして話をしていったのだ。

そうだ。どこにいるかなんて関係ない。私たちはチームなのだ。

そう思いつつ、私はメロンクリームソーダを一口、勢いよく飲んだ。

これが、嵐の前の最後の日常だということも知らずに。

## 第八章 決壊

その後まもなく、私はソロライブを決行した。

クレイジークローラーのファンの子も来てくれたり、同じように音楽を歌っている女の子たちがいたりもした。

私は黒のワンピース風の衣装に身を包み、せり上がり式のステージからステージに飛び出した。

私が飛び出してきた瞬間、声が多数発生した。

「きゃあああああ!」「モモーーーー!!」「うおおおおお!」「待ってたよ!」「かわいいいい!!」「いやかっこいいだろ!!」「わあああああ!」「無理無理無理!」「好きーーーー!!」「来たーーーー!!」「うちわ見てーーーー!」「モモさあああああん!!」「モモちゃーーーーーん!」「待ってたぞおおお!」「モモーーーーッ!!」「わああああああ!!」「モモーーーーー!」「モモ!」「かっこいいぞおおお!」「衣装かわいいー!!」「大好きだよ!!」「いやあああああああ!」「モモ~~~~~!!」「モモーーーーッ

!!」「モモ!!」「かわいいー!!」「モモー!!」「きゃあああ!!」「うわあああ  
ああ!」「推しー!!」「やつば、かわいい」「無理無理無理ー!!」「うわあああ  
あああモモー!!」「やべえ吐きそう」「スキーー!!」

歓声は、鳴りやむことを知らなかった。

「わたしも」

たった一言そう呟いて、笑顔で微笑む。

それだけで、みんなの歓声が沸く。

沸騰したやかんみたいに、しゅうしゅう、きんきん、爆発。

そのリピドーが、私を熱くする。

幸せだ。

カケルさんにも褒められて、興行収入も見込みの数倍以上の額を達成していたことを聞かされた。

「本当ですか!？」

「ああ。すごいものを見たよ。僕もモモがここまで有名になって、嬉しい」

「へへ、ありがとうございます」

カケルさんは優しく頭を撫でてくれる。

ライブの焦燥感と、終わった後の熱い高揚感は、数日間私の心を燃やし続けた。

「モモ、聞いたよ！ 武道館ライブ、おめでとう」

「ありがとう、亮さん！」

「ソロは大変かもしれないけど、俺は応援してるぞ。ほら、ファンクラブ会員番号一番!」

亮さんはそう言って誇らしげに、スマホのファンクラブ会員証を見せてくれる。

「わあ、昨日からファンクラブ始まったばっかなのに、もう登録してくれてるの? ありがとうだよお」

うれしそうに微笑むと、同じように亮さんも笑顔になる。

「何かつらいことがあったら言ってくれ、いつでも相談に」

べぎッ。

その異音は、何かをつぶしたような、よっほどに力を加えないと聞こえないような音で。

その異音の正体は、祐也自身がついさっきまで飲んでいたペットボトルをひしゃげた音で、中に入っていた水が散らばってしまう。

「ちよ、祐也、どうしたのよ」

ぼたぼたとこぼれていく透明な液体を拭くために、雫さんは控室にあったぞうきんを持ってこしこしと床を拭く。

「別に、どうってことねえよ」

「嘘。武道館ライブ終えてからずっと顔が怖いぞ。何かあったのか?」

「だからなんもねえって」

祐也はよっぽどイライラしているようで、貧乏ゆすりが止まらない。眉間にしわも寄っていて、ふうふうううと自分を落ち着かせるために深く息をついていた。

「祐也」

私はそんな祐也を見かねて、たまらず話しかける。

「何かつらいことあったら言っ、私でよければ、相談に」

「元凶」

「えっ?」

祐也は私の言葉に触発されたかのように、私の頬を平手打ちしてきた。

「ちょ、祐也! あんた女の子になにしてんの、よ」

床に倒れこんだ私を起こし、キツと祐也を睨みつけ説教をしようとした雫さんでさえ、呼吸を止めてしまう。

祐也は、見るもおどましい、真っ赤な悪魔のような顔で、泣きながら、私の胸ぐらをつかんできた。

「お前が、全部の元凶なんだよ!」

祐也は怒鳴り散らし、私の体を揺さぶる。

「お前がカケルに認められなければ、お前がカケルさんカケルさんっていうたびに、俺はって胸

が締め付けられる。お前の笑顔を、行動を、歌を聴くたびに、イライラして、吐きそうになって、熱くて仕方ないんだよ。おとおおとおおとおおとおおとおお!!」

「ゆ、や」

「やめなさい!!」

雫さんが私を祐也から引き離し、亮さんが祐也を羽交い絞めたことによって、私たちは無理やり離される。

「げほ、ほ、うえ」

私がのどに手を当てて嗚咽ともとれる咳をしていると、心配そうな顔が私の視界に入ってくる。

「モモ、しつかりして!」

「祐也ごめん。お前もアーティストだったよな。お前の前でモモのソロのこと話すの控えるから、やめてくれ、お願いだ」

亮さんが涙声で諭すのもむなしく、祐也は一呼吸置きゆつくりと亮さんのほうを向く。

「はなせよ」

その言葉は無気力で、怒気も孕んでいて、情緒がわからなかった。

揺さぶられたことにより朦朧としている頭を雫さんに撫でられているところに、祐也が歩い

てくる。

そして、ひとこと。

口を開けて、涙声で、ゆっくりと。

「お前の歌、二度と聞きたくない」

ぽつりとひとつぶ、私の頬に水滴。

それだけ言つて、祐也は荷物を持つて控室から出ていく。

祐也は、二度と私たちの前に現れることはなかった。

それでも、コンサートをやらなきゃいけない。

雫さんと亮さんが、そう大人と話していた。

「ここでやめたら……」

「キャンセル料……」

「払い戻し——」

お金のことが頭に入ってくる。

私は、お金のために歌っていたんだっけ。

違うよなあ。

『お待たせいたしました、クレイジークローラーの登場です！』

わたし。

『ごめんなさいねえ、今日はユーヤ、体調不良みたいで休みなの』

わたしの、歌。

そうだ、歌おう、

『モモ、いつもみたいにやっちゃって！』

わたし、歌。

歌うの、私。

私には、歌があ——

「お前の歌、二度と聞きたくない」

ごとん。

キ――――、ン。

涙を一つ、私の頬に落とした、彼。

私は、マイクスタンドの前で、崩れ落ちる。

息だけを吐いて、声を吐けずに。

モモという単語だけが、私の頭に轟く。

「うえ、なざっ」

謝罪が、言葉に変化していかない。

「うたえ、ませ、ん」

この言葉しか、私の脳には浮かんでいなかった。

第九章 ずれていく

クレイジークローラー、解散の危機。

その単語が、週刊誌のトレンド一位を独占して、もう一か月が経った。

そうなるのも無理はないだろう。

『確かに祐也につらい思いをさせていたのは私たちです。彼を責めないで——』

テレビをつけて聞こえるのは、今も分析を続ける大人たちと、分析される私と亮さんと雫さんの謝罪会見。

あの後、私たちはキャンセル料を払い、業界の方に謝罪回りをした。

怒っている会場の係員さんやファン、慰めてくれるファン、わざわざ激励のメッセージを送ってくれる子供たち。

私はそんな人たちの言葉よりも、祐也の言葉のほうが、深く、深く突き刺さっていた。

「おまえのうた、にどとききたくない、か」

私はベッドに身を投げ、うずくまる。

涙はもう乾いてしまった。怒りも、心さえもどこかに行ってしまったようで、私は一か月間ずっ

と、ベッドでうずくまって、ただただ考え事をしていた。

あの時、私がカケルさんの期待に応えていなかったら、みんなと、もっと一緒に、祐也ともっと、活動ができていたのだろうか。あの日、私が祐也に声をかけなければ、あんな惨事を起こしてしまふことはなかったんじゃないだろうか。あの日、あの時、あの日。

ぐるぐる、ぐるぐる、考えが頭の中で宙を舞う。

ふっと携帯を覗くと、カケルさんからメッセージ。

『モモ、つらさが取れるまでしばらく休んだほうがいい。今はメディアもうるさいだろうし、君の精神を安定させるには休むことが必要だ』

カケルさんはあんな騒動を起こした私にも優しく対応してくれて、率先して休むように話をつけてくれた。私がこんな軟弱ものじゃあなければ、休んで周囲に迷惑をかけることもなかったんじゃないだろうか。私がこんなにネガティブじゃなかったら、私が、私が、私が。

また考えが嫌な方に流れて行って、私は深くため息をつく。  
もう、何もしたくない。

虚無な心は、いつまでたっても虚無なままだった。

「この度は誠に、申し訳ありませんでした」

亮さんの謝罪とともに、私と雫さんも頭を下げる。背後に吊り下げられた白いカーテン、喪服のように黒いスーツの三人、あふれんばかりのカメラマンとフラッシュ。

その光景は、誰が何と言わなくてもわかるまがまがしさと、「謝罪会見」というのが伝わってくる異様さだった。

結局謝罪会見にも祐也は来ず、三人だけ。その状況も、パパラッチたちを興奮させた。

『週刊貴人です。今回の経緯を教えてください』

調べてきただろうに、確認のためだろうか、そんな質問が最初に飛んだ。

「はい。ライブ直前、楽屋で気持ちの食い違いがあり、我々三人と祐也で溝ができてしまいました。その後楽屋を出て行ってしまった祐也を止められなかった我々の責任でもあります。申し訳ございませぬ」

亮さんは長めの髪をオールバックにして整えていて、フラッシュでワックスが光る。

『月刊中宗です。一部マスコミの報道によりますと、祐也さんがモモさんに不満を抱いていて、それが爆発してしまった……』という旨の報道がされていますが、モモさんその点はお間違いないでしょうか？』

カメラが一気に私に向く。私は焦燥感を引きずりながらも、ゆっくりと立ち上がってマイクを握った。

「はい。間違いありません」

罪人になったような気分だ。いや、もう罪人なのだろう。私たちがしたことなんて、正直詐欺罪で訴えられてもいいぐらいのことだ。場所を抑えてくれたスタッフの皆さんにも、期待を込めて待っててくれたファンの皆さんにも、雫さんにも、亮さんにも、祐也にも、申し訳ない。

もう、消えてなくなってしまうたい。

『えっ…は、あ、ありがとうございました』

気が付いたらすべて声に出していたようで、記者たちはドン引きしたような表情を浮かべる。

『さ、雑誌裏腹です、その、えーっと、祐也さんについて、なにか思うところはございますか？お三方それぞれ、意見が聞きたいです』

亮さんが率先して話そうとするも、私の隣にいた雫さんが貸してとつぶやき、先に立ち上がった。

「この度はお騒がせして申し訳ございません。我々個人の思いがぶつかってしまった故、このような状況となってしまったことをお詫び申し上げます」

そう前置きして、雫さんはふうふううふううと、以上に深くため息をついた。

「私は祐也だけを悪者にしたいわけではありません。それを前置きさせていただきます。確かに私たち三人にも悪い所、直さねばならないところはございました。彼が何を思っていたかはわかりませんが、あの日、祐也は楽屋でモモの胸ぐらをつかんで暴れました」

「ちよ、雫！」

亮さんが慌てて止めようとするも、雫さんは哀し気に微笑む。

「ごめん。でも、言わせて」

その目にはほんの少しの怒りが混ざっていて、亮さんはうつむいてしまう。

「私としては、祐也がどうかかモモがどうかではなく、人が、人に、手をあげた。この状況が、一番の問題だと思えます。彼が誰を恨んでようが、誰を嫌おうが勝手です。ただ、手を出したら一気に底辺です。誰が悪いとかは好きに考えてください。でも、私個人は彼にも非はあつたと、思います」

ただ黙って亮さんへと、マイクは渡される。

「えー、雫が話したことはおおむね事実です。ですが僕は、僕個人としては、またクレイジークローラーとしてバンドをやっていききたい、そう思っています。モモの歌も、祐也のギターも、雫のドラムも、もちろん僕のベースも、全部がそろわないとクレイジークローラーは完成しない。パズルのピースは一つでも欠けていたら、完成することはない。だからこそ、僕は祐也を待ち

ます。まずは会って話を、声を、聴きたいです」

亮さんのやさしさがこもった声。そしてマイクは、私に渡される。

私と祐也が揉めた。そして二人が巻き込まれた。世間はそう見えるのだろう。

「えと」

私は、何がしたかったのだろうか。

このバンドに入って、何が、何を。

このバンドを壊したかったわけじゃない。このバンドを、憎んでもいなかった。

好きだった。ここでの居場所が暖かくて、愛しくて、何よりの宝物だった。

でも、私の存在は、邪魔だったみたい。

「祐也は、私を恨んでると思います」

私に言った、あの言葉。

「祐也は、私のことが憎いと思います」

もう私の歌、聴きたくないみたい。

「それでも、私は、彼のギターの音色が好きです」

でも私は、あなたのギターが聴きたいな。

できることならもう一度、あのギターが聞きたい。

私がマイクを持ったままうつむいていると、亮さんと雫さんが立ち上がって、亮さんが私に手を出してマイクをそっと優しく渡すように促してきた。

「えー正直、我々の中でもまだ意見がまとまっていない次第ではありますが、ファンの皆さんへのライブ代、場所を抑えてくださった会場スタッフの方々への返金手続きはしっかりと対応させていただきます。僕たちはしばらく、活動を休止する次第ですが……」

亮さんが思わず、言葉に詰まってしまふ。見ると、眉間にしわを寄せ、あごに力を入れて涙をこらえる様子があった。

「それでも、待っていてくださるファンの皆さんのために……僕たちが、僕たちは、前を向いて、歩んでいきたいと思っております」

すん、と鼻をすすった亮さんが、前を向く。

「この度は誠に、申し訳ございませんでした」

時間も相まって、こんな形で記者会見は終了した。

その後、後を追うようにカケルさんはブログを更新した。

『未熟さが露呈している。ギターはそんな気持ちで演奏するものではない』

たった一言だけだったけど、この言葉にはコメント欄で多くの論争が繰り広げられていた。クレイジークローラーのことだというのは明記されてこそいなかったものの、やはりわかつて

しまうみたいで、『そうだそうだ!』『モモは悪くない』『クレイジークローラーにとってはお荷物なギタリスト』という意見や、『お前関係ねーだろ』『モモのプロデューサーだからって首突っ込みすぎ』『うぜえ』などと檄を飛ばす声も見えた。

「カケルさん……」

「何スマホ見てんの。ダメ」

会見後に車に乗って移動中、臃げにスマホを見ていると、雫さんにスマホの画面を手でプロックされてしまう。

「ダメよネガティブになっちゃ。エゴサなんでもっとダメ」

今はマスコミ全部が、クレイジークローラーを取り上げ、放送または勝手な密着番組を立ち上げている。

「とりあえずしばらくはメディアに触れないほうがいいわ。ほら、触らぬ神に祟りなしってね!」雫さんの言葉に、私はただうなずいた。

『祐也、だいじょうぶかな』

絶望感の中で、私は未だに祐也のことを考えていた。

そんなことがあって、二か月。

最初こそクレイジークローラーのことを取り上げるテレビを垂れ流していたが、もう最近は何も聞いていない。

無音の世界で、宅配で頼んだご飯を週に数回食べて、ずっと寝る。

「去年の今頃に、戻ったみたい……」

味のしないガムみたいなパスタを食べて、今日も私は眠る。

世間では今、何のニュースが話題なんだろう。

何が流行っているんだろう。

何が楽しいんだろう。

「どうしよう、これから……」

むなしい言葉が、ひろいひろい部屋に反響した。

びん、ぽん。

少し遠慮気味なインターホンの音が、私の脳に響いた。

「はい」

久しぶりに声を出しながらよぼよぼ歩いて、扉を開ける。

「モモ、久しぶり」

聞きなれた、穏やかで優しい声。

人によっては中世的に聞こえる、このお母さんのような声の正体は。

「げんき……って言える感じじゃあないわね。調子はどう？」

少し髪が伸び、セミロングヘアになった雫さんが、そこに立っていた。

「雫さん、私、私」

雫さんの顔を見たときに涙があふれてたまらない。久しぶりに見た仲間の顔に、私は懺悔の気持ちというか、よくわからない感情があふれ出してしまふ。

「おーよしよしよしよし。もう大丈夫よ、今まで会いに来れなくて、ごめんなさいね」

頭を優しく撫でてくれる手は本当に暖かくて、ほんのりと幸せを感じた。

「俺も来たよ、モモ。大丈夫、大丈夫」

「亮さん……！」

亮さんと雫さん両方にしがみついて、私は年相応に泣きじゃくった。緊張の糸というか、張り詰めていたものがぷつぷつと途切れたように、私は泣いた。

二人のぬくもりは、時がたっても変わっていなかった。

「変わりなくて、良かった」

亮さんの優しい声に、私も安堵する。

「亮さんも雫さんも、変わりなくって。あ、雫さんは髪の毛伸びた、ね」

「そうよ、伸びたわ。亮も伸びてたのよ、昨日切っちゃったけど」

「そうなんだ」

以前楽しく続けられていた、たわいもない話も、いつの間にか話題は消え失せてしまう。

なんだか気まずい空気が漂う中、亮さんは膝をこちらに向けて、改めて話し出す。

「あの、今日来たのには、理由があつて」

言いにくいんだけど、と言いつつ、私の目を見る。

「モモ。もう一回、復活ライブをしよう」

亮さんの提案に、心臓がはねた。

「もう一回演奏したいっていうのもあるけど……正直このままフェードアウトしてしまう気がし

て」

「私は亮の意見に最初こそ反対したの。でも、確かに演奏することの楽しさはもう一回味わいた  
いものがある。それに、最近よく「復活まだですか」「もう一度、ぼろぼろのライブハウスでも、  
野外でもいいから、開催してほしい」って問い合わせさせてくれることが、増えているの」

雫さんは言葉を選びながら、会話を進めていく。

「正直私たちの考えはモモの考えに反しているのかもしれない。嫌かもしれない。けど、私はモ  
モの声が聞きたいし、もう一度、私たちが演奏を、モモの歌を、聞きたいなって」

雫さんも亮さんも、瞳がまっすぐだ。

きれいな眼差しが、私をとらえて離さない。

二人は、どうしてそんなに熱くなれるのだろう。

私は、何がしたいのだろう。

「お前の歌、二度と聞きたくない」

「歌っても、いいのかな」

「ん？」

亮さんが顔を覗き込んでくるものの、私は息をついて頭を下げた。

「ごめんなさい。ちよっと、考えさせて」

誰にも相談することなく、私は眠った。

きゅっと思いを隠して、どうしたらいいかわからないなりに、思考をまとめて。

くるくるしていた。

そうしたら、夢を見たのだ。

『ミュチャのモモは、クレイジークローラーのモモだったの!?!』

『歌い方、変わったよね』

『誰かをまねてるのかな?』

『ちよっとがっかり。リアルに染まった』

誹謗中傷が、黒い霧となって私に襲い掛かる。

痛い。

痛い。

痛い。

痛い。

いやだ。

過酷だ。

やめて。

『でも、これはこれでよくない?』

私の視界が、その言葉でぱつと明るくなった。

『ミュチャの時からモモのこと好きだったから、うれしい!』

『ライブ来ちゃった! モモも、ほかのバンドメンバーもかっこいい!』

その言霊は、人間となって具現化する。

「モモちゃん、こっちみてー!」

この子は、ライブの時に前列でうちわを持っていてくれた子。

「モモまだかな！ 早く歌ってくれー！」

ミュチャと同じような言葉をいつもかけてくれていた、さわやかなお兄さん。

「ミュチャ友として、うれしいよ」

ミュチャでコラボしてくれた、同じ歌い手のみんな。

みんながみんな、明るい顔で私を包み込んでくれる。

「モモ！」

「モモちゃん！」

「モモ」

振り返った先には、バンドメンバーの三人。

祐也は、背を向けているけれど。

「うたって」

「ごめん」

朝焼けに包まれながら、私はミュチャを起動した。

ほかの通知なんて目もくれない。

私は、声を。

歌を。

子供の頃 知りたかったことは

案外残酷で

僕の心は くすんでいつて

鎖で 繋がれてる

寂しさ 押し殺してみても

なんにも変わらない

どうしてなの

僕はただ

知りたいことがあっただけなのに

I can't be free

自由になりたい

この枷 解いて

誰か聞いて

Where is freedom?

自由が欲しい

それだけなのに

ただ それだけなのに

ミュチャのラプラス音源は、しよぼくれています、音質もよくない。

「わたし」

それに、生演奏のほうか、ギター、ベース、ドラム。これらが後ろで演奏されていたほうが、もっと楽しいし気持ちいい。

「わたし」

でも。

でも。

わたしは。

「まだ、歌える」

待ってたよというコメントが、私の涙の起爆剤となった。

その直後、亮さんに

「やっぱり、ライブ、やらせてください」

と、メールを送信した。

## 第十章 決起

亮さんと雫さんと話し合って、数日。

「ライブ決行日はもうあと二週間！ ブランク取り戻していくわよ！」

「おー！」

雫さんの掛け声に、私と亮さんも声を上げる。

亮さんも雫さんも、やっぱり楽器を持っていたほうが様になる。かっこいいし、無敵な感じがする。

「じゃあまず、lock on から行こう！」

亮さんの掛け声で、私たちの演奏は始まる。

ブランクを感じさせないベース、ドラム。

ギターの音は、音声で。

「行こう」

一言、息を吸う。

「モモすごいじゃないの!」

「ブランク一つもないよ、のどもいい感じ」

雫さんと亮さんの言葉で、私もほっと胸をなでおろす。

「……ありがとう」

私はなんだか心の底から笑えなくて、マイクを握りしめたまま俯いてしまう。

たとえ立ち直ったといっても、どうしても、祐也に言われたことが頭に残って引っかかってしまう。

「……あの、ちょっといいかな」

「どうしたの?」

「あの、ライブなんだけど……」

私はマイクを握りしめて、ひとこと。

「祐也も、呼ぶよね……?」

私は、祐也のことをどうしても忘れられない。

クレイジークローラーは、祐也がいないと成り立たないのだ。祐也がいなければ、四人とし

ての演奏は難しい。

「……わかった、俺が連絡するよ」

「えっ、本当！」

「ああ」

私は亮さんに、ありがとうと頭を下げる。

「ちよつと亮、あんた」

「いいんだ。大丈夫」

亮さんは携帯を取り出して、なにかを打ち込んでいく。作業が終わったとき、かおをぱつと上げて笑顔になる。

「さあ、曲の順番通りの流れで行くよ！」

掛け声とともに、また演奏が始まっていく。

無我夢中で演奏をする二人に合わせるように、私も歌を歌う。

そうやって声を重ねて、いよいよ本番。

「これ、モモの今日の衣装！」

控室にて、スタイリストさんがマネキンにかぶせた白い布を思いっきり引つ張ると、美しいドレスが現れた。

首には赤いバラがあしらわれたチョーカー、黒色の膝丈までの、長袖のドレス。これだけだと雰囲気はシックだが、ところどころにあしらわれたラメと赤い宝石、腰のフリルのようなりボン。

「これに低めの黒いヒールに、赤いベールマントを羽織ってもらおうわ」

あなたは今日は王様だからね、と微笑まれる。

「ありがとうございます」

ペコペコお辞儀をしつつ更衣室で着替えて、姿見の前でくると舞って見せる。

動いたびにフリルが揺れて、私は思わず笑顔になる。色とりどりの宝石が、きらきら光ってまぶしい。

「はいこれ、マント」

布の隙間から渡された厚めの布を纏うと、ふかふかの触り心地にちりばめられた宝石たち。

「いろんな種類の宝石をあしらってみたわよ。お値段なんと」

「言わなくて大丈夫です！ 怖いから！」

スタイリストさんと楽しく談笑していると、ぞろぞろと親愛する二人が入ってくる。

「お疲れ様です……あら、モモ！ かわいい！」

「うん、いい感じじゃ、ないか」

「あらっちょっと、亮ってば泣いてるの?」

「な、泣いてない!」

少し涙声のような亮さんに対して、雫さんがツツコミを入れる。

「亮さんと雫さんも、素敵」

雫さんも私と一緒に黒色の宝石ドレスだ。ノースリーブで足首までの長さなところが、私と違うところだろう。

亮さんも黒のタキシード風の衣装に、背広が少し眺めで宝石がちりばめられている。ハイセンスな感じがかっこよくて、私は微笑んだ。

「あらモモ、うれしいわ」

雫さんの毛先がカールされたセミロングヘアが、ふわりと揺れた。

「ありがとう、モモ」

亮さんはもはや、泣くことを隠す気すらなく鼻をすすり始めた。

「ちょっと亮、化粧落ちるわよ」

「だって、一時はどうなることかと」

「はいはいまだ髪の毛もセットしてないからね。行った行った」

スタイリストさんは二人を外に追い出し、私にこっちに座ってと言いつつドレッサーの席を

向けてくれる。

「いいドレスでしょ、二人に言われすぎちゃったけど」

「はい、とつても素敵」

私は胸にあしらわれた大きなルージュに触れながら、ぼつりとつぶやく。

「これ、祐也も気に入ってくれるかな」

私の一言に、スタイリストさんはゆっくり、うんうんと、頷いてくれた。

「きつと気に入ってくれるわよ。素敵なもの」

私はその言葉を聞いて、握りこぶしを作ってたただ頷く。

「さ、次は髪の毛よ！　ぐりんぐりんにしてあげるわ！」

「ぐりんぐりん……」

ちよつと意味が分からなかったものの、私はお願いしますと頭を下げた。

『まずは、この場を借りて謝罪させてください。本当に申し訳ありませんでした』

開口一番、亮さんの謝罪で、私たちのライブは幕を開ける。

『えー、いろんな意見があるのは重々承知しています。もちろんここにいない祐也のことも、いろんな意見があることを知っています』

亮さんが、ほんの少し口ごもる。

『でも、僕たちはライブをします。祐也のためにも、みんなのためにも』  
亮さんの言葉に、私たちも頷きながら聞く。

『最後まで聞いていっていただけたら、幸いです』

ファンのみんなは静まり返っていて、私たちの話に耳を傾けている。

『じゃあ、歌います』

『lock-on』

見慣れた世界 当たり前の世界 苦しい世界 怖い世界  
だけどそんなの もう飽きた 私の国境はもうないんだ  
沈んだ景色 暗い景色 沈んだ景色 悲しい景色  
跨いで 走って 蹴飛ばして 塗り替えて

愛する気持ちにハードルはない 恋する気持ちにプライドはない  
それでいいだろう そうだろう？ 未来はいつだって明るいんだ  
しあわせな気持ちにふしあわせはない 楽しい思いにつまんないなんてない！

やりたいことなんて 誰も止めれない！

さあ 君の世界を 教えて！

始まってしまえば始まってしまえばで、会場は湧き上がる。

私たちが熱いリビドーを打つことも、正直容易かった。

ライブの歓声もヒートアップさせたまま、私たちの曲は最後のアンコール演奏へと差し掛かる。

「最後のパートだ、頑張ろう、モモ」

亮さんの言葉も心にしみていくものの、私はたった一人の人間が常に頭の中によぎる。

「ねえ、祐也は」

私は周囲を見回す。あの赤髪を、探して。

どこだろう。

きつとここにいるはずだ。

だって亮さんが、連絡を入れてくれているはずだから。

「……モモ、あのね」

「あー……来る！ 来るぞ？ どうしたんだ、モモ」

「あの曲は、最後の曲は、祐也が一緒じゃないと」

いやなの、と声を詰まらせる私に、雫さんが苦虫を噛み潰したような顔をする。

「モモ、落ち着いて聞いて」

「やめろ、雫」

亮さんが、怖い顔をして雫さんの肩をつかんでいる。

「亮さ、ん？」

眉間に寄つたしわ。これ以上言うんじゃない、という物々しい雰囲気。

でもそんな考えは杞憂に終わったのか、亮さんはうつむいて息をついた後、すぐに笑顔になる。

「ああ、大丈夫だ、モモ。祐也、電車が遅延してるって」

「でんしゃ？」

「そうそう、ちょっと都合が悪いみたいだ。でも、途中から来て、アンコールから参加って形かな。それも素敵だろ？」

な？ と首をかしげる亮さんに、私は心が安らいで、口角が上がってしまふ。

「うん、うん！ そうだね！」

私は勢いよく頷いて、そうと決まれば！ と勢いを込めて手を水平に出す。

「えいえいおーしよう！ 私たちの、最後の曲！」

私の提案に対し、亮さんと雫さんが目をぱちくりさせたあとに、微笑んでくれる。

「それいいな！ やろう！」

「最初にもやったけど、こういうのはいくらでもやっていいしね！」

楽しそうな声に、スタッフの人たちも美術さんも照明さんもスタイリストさんも、みんなみんな集まってくる。

「えっと、最後です！ お客さんも楽しんで！ 私も楽しい！ みんなも楽しい！」

私の掛け声に、みんながおう！ と声を出す。

「このまま、一生の楽しさを更新しよう！」

私の言葉に、全員が雄たけびを上げる。かっこいい。楽しい。全身が、びりびりする。これだから、歌を歌うことがやめられないのだ。

「じゃあ、行こう！」

私は、私たちは、ステージに向かって走る。

『ごめん、最後になっちゃった』

もう一度ステージに立ちあがって、私は声を上げる。それとともに、ファンみんなの悲しくもあり勢いもある歓声が会場内を包み込む。

『本当ならここに、祐也がいるはずだったんだけど……ちよつと来れてないみたい。途中から、場を見て入ってくるかもね！』

あはは、と私の笑いが、会場にこぼれました。

『私のわがままで、ごめんなさい。でも、みんなも歓迎してくれると、うれしいな』

ファンのみんなからの歓声が大きくなって、私は涙があふれそうになる。思わずうつむいて、目尻を少しだけ拭いた。

『……ありがとうございます。では、さいごに。この曲を』

『ロッキンブルーな君に捧ぐ』

変わっていく君に

僕は怖気づいてしまったんだ

これからのこと あしたのこと

もう過ぎ去った昨日のことだって

知りたがる君に

僕は ひるんでしまった

冷たいまなざし むけられそうで

どうせ変わるなら

僕も連れて行ってくれないか？

どんなところでもいい

どんな場所でもいい

どんな世界でも、いい

居場所なんて 君の隣にいくらでも あるから

「完全復活だったわね、モモ！」

「ああ、すごい歌声だった！ 今までで一番、いや、比べようもないぐらい、最高のパフォーマンスだったよ！」

「そうです、すごかったです、モモさん  
「かつこよかったです！」

みんながみんな、私に肯定的な意見を出してくれる。確かに私は楽しかった。とても有意義な時間だったし、また雫さんと亮さんと演奏できたのも、ファンみんなに出会えたのも楽しかったし、幸せだった。

「ねえ、祐也は？」

でも、たった一人の人間が来なかったことは、私の心にずっと靄ついているものを残していた。

「こんな電車で遅延するものなの？ それに、私さっき見ちゃったの。都内の電車、この会場に関係ある線路は全部遅れてなんかなかった」

「モモ……」

「二人とも優しいから、きっと私が傷つかないようにって思って、隠してくれてるんだよね」

私は二人に、頭を下げる。

「ありがとう。でも、真実を教えてください」

ゆっくり顔を上げて、私は二人の顔を見つめる。

少し躊躇した後、雫さんが重い口を開いた。

「実は、祐也は」

唇が震えている。

少しだけかみしめた下唇は、やがて離れて、雫さんは開口する。

「麻薬を使っていて、過剰摂取で緊急搬送されて、記憶喪失に……」

## 第十一章 自由

祐也が救急搬送されていたということを知って、私は家に帰り長らく電源を入れていなかったスマホを起動する。

ニュース画面には私の知らないありとあらゆることが載っていた。最近の流行りのファッションや音楽、芸能人の事件簿。その中でもクレイジークローラーのことは、一応トップになっていた。

『華々しい復活！ クレイジークローラー！』

仕事が早い。私と雫さんと亮さんの三人がステージから笑顔で演奏している写真が、たくさん並んでいた。

確かにこの時、とつても楽しかった。一瞬一瞬がまるで宝石のようにきらめいていて、私にはもつたないくらい笑顔、笑顔、笑顔。

それでも、祐也への一抹の焦りと不安はぬぐい切れていなかった。

「四人そろってのクレイジークローラーだから、復活なんかしてないのに……」

私はそう小声で呟きながら、スマートフォンで検索をかける。

『クレイジークローラー 祐也』……えっ？』

クレイジークローラーでスペースを一つ開けた後に祐也と入れただけで、麻薬、逮捕、麻薬の種類、意識障害、引退、活動中止など、マイナスな言葉が予測変換にびっしりと並んだ。

『どういう、こと……？』

わけがわからない。祐也は誇りをもつて、ギター演奏に向き合っていたはずだ。

ただ音をかき鳴らしているわけではない、何よりも、自分が楽しい演奏を。

そんな彼を、彼自身を、私はとても尊敬していたのに。

「バンドマンの柊祐也容疑者、覚醒剤取締法で逮捕」

私は一つのタイトルを見つけて、そっとタップしてみる。

「数年前から少量を使用、逮捕の数時間前に過剰摂取で倒れ見つけた際にはすでに意識不明の重体……」

本文を読み上げ、私はぞっとした。

祐也は数年前から覚醒剤を使用していたのだ。

だいぶ前にカケルさんから聞いたことがある。スランプや強烈なジェラシーに陥った人間が麻薬に手を出すのはよくある話だ、と。

「実際に僕の周りにも、薬物で捕まった奴らがいたよ。薬物は甘えだからね。僕はそんな奴らを

信用できないし関わりたくないから、復帰している人間でも未だに共演はしたくないという旨を示しているんだ」

カケルさんは意外と、信用や信頼などの目に見えない感情を大切にする節がある。そんなカケルさんだからこそ、薬物に支配された人をもう一度信用するのは自分の心が許さないのだから。

「祐也の病院に、行きたいです」

そんな考えを持つカケルさんに祐也のことを電話で話したら、一瞬声が遠くなる。

「……………」

一瞬どころか長続きしてしまう沈黙に対し、私はただ黙って返答を待った。

「そうか」

「はい」

たった一言かえってきた返答に、私も返事をし返す。

「正直、僕は反対だ」

わかり切ってはいたけれど、鈍器で頭を打たれたような衝撃が私を襲う。

「今は大人しいし薬のせいとはいえ、モモを傷つけたのは事実。それに、薬に手を染めた人間を僕は信用できない。不安だな」

「私も不安ですよ」

不安という言葉に触発されるように、私も言葉を紡ぐ。

「不安だし怖い。何よりも歌うことを拒否されてしまったから。もちろんそれ以外にも理由があるのかもしれない」

「モモ。会うのはやっぱり、控えたほうがいいんじゃない」

マスコミの目もあるし、とカケルさんは続ける。

「そうしろとは言わないよ。けど、僕は」

「ごめんなさい。カケルさん」

「ん？」

私はあれこれ理屈をこねるよりも、私は意を決して最短コースでの説得に踏み切った。

「私、祐也に会いたい」

私のストレートな言葉に、電話越しでもカケルさんが聞く姿勢を保ってくれているのがわかる。

「あんなこと言われちゃったけど、でも、会って話したいの」

私はあえて、矢継ぎ早に言葉を続けた。

「祐也がどんな姿でも、どんな風貌でも、会いたいって思っちゃった」

ごめんなさい、と小さく付け加えると、カケルさんの吹き出す声が聞こえる。

「ふふ、モモならそうすると思っただよ」

最短コースでの説得の話だろうか。それとも会いに行く話だろうか。いずれにせよ、カケルさんの声は穏やかだ。

「正直僕はモモをあそこまで傷つけた彼が憎いさ。でも、彼を思うモモの気持ちを止める権利なんて誰にもない。好きに会いに行つていいんじゃないかな」

無責任なように聞こえたらごめんねと、カケルさんは続けた。

「ただ、薬物に一度侵された人間の容姿はひどく変わってしまう。狼狽こそするだろうけれど、気をしつかり」

「うん。ありがとう。カケルさん」

カケルさんはきつと、私のことが心配なのだ。

また話したときに危害を加えられるんじゃないか。

もう二度目はない、ギターリストとしても一人の人間としても。

きつとそう思っているのだろう。

「でもねえ」

会いたい気持ちだが、勝ってしまいました。

心の中で謝りつつ、私は謀反のためにこっそりとクローゼットの奥にしまっていたコートを引っぱり出す。

「でかいなあ」

私のサイズよりも二回り上ぐらいの、大きなフード付きコート。そしてポケットの中にはサングラス。

「いい？ コンビニに行くにしろ、モモは未成年だし目立つわ。外に出るときは、できる限り地味目のこういう服を着るのよ。わかった？」

オカンスキルが高すぎる雫さんの言葉を反芻しながら、私はコートを着込み、外に出る。

「すみません。隣の帝王都大病院まで、お願いします」

その後すぐにタクシーを捕まえ、病院名をさりと告げた。

祐也が入院している場所は、ネットをあさったらすぐに出てきた。なんでも、ファンやマスコミが押し掛けてきたことが原因で、面会が拒否されているらしい。

でも亮さんが時折会いに行けているのだから、きっと私も行けるはずだ。

私に乗せたタクシーはすぐに着き、運転手さんは分かりにくいように裏路地に止めてくれた。

「ここのちよっと狭い垣根を抜ければ、すぐ入れると思うよ。お姉さん、そっちのほうが目立たなくっていいでしょう？」

「はい。ありがとうございます」

ぺこぺことお辞儀をしつつ、私は言われた通りに垣根を抜け、裏口であろうドアに突撃する。

「あの、見舞いに」

私の風貌と見舞いという言葉を見て聞いただけで、血相を変えたように院内関係者が勢ぞろいし始める。

「ごめんなさい、関係者以外は通すことはできない状況です……」

「ちよつとお帰り願いたいのですが……」

看護師さんとお医者さん、それに警備員さんに止められるも、私のペースは乱れない。

「ごめんなさい、変装しないと怪しまれるんです」

そう一言告げて、フード付きコートとサングラスを外す。

クリアになった視界には、ただ口を開けて驚く三人が立ち尽くしていた。

「クレイジークローラーの黒瀬桃、またの名をモモと申します」

通された部屋は個室で、澄み切って静かな空気に包まれていた。

「こちらです」

ほんのりと香る病院特有の薬品臭、どこかから聞こえる電子音。

「ゆう、あ……」

ベッドで眠る祐也の顔は、想像以上にグロテスクなものだった。

眠っている、のに目はかっぴらいている。口もほんのり開かれていて、二、三滴のよだれが滴っていた。入院着は半そで、そこから見える体はほとんど骨と皮だけになっていて、ところどころ瘡が見える。中でも一番酷いのは、二の腕からひじの裏側を経て手首までに広がる、血管のようにも見えるおどろおどろしい瘡の集合体。

「過剰摂取なので、正直いつ容体が急変してもおかしくないんです。目が急に覚めることはないんですけど、半昏睡状態で暴れる可能性だってあり得ます」

「そんなに、酷いんです?」

「だから薬物は恐ろしいんです。人の命なんて簡単に奪う。勧めてくる人間だって、死ねと言っているようなものなんです」

本当に恐ろしいのですよ、と看護師さんはため息交じりにつぶやいた。

確かに、薬物は恐ろしいものだ。

でも、なんとなく「そうなんだ」としか思っていなかった。テレビとかで流れる芸能人逮捕

のニュースも、高校生が薬物を売っていたという事件も、全部「怖い」とか「気を付けよう」という薄っぺらい感情の、所詮は他人事という気持ちは強かったのが正直な気持ちだった。

でも、実際にしている人が、それもバンド仲間、苦楽を共にした大切な人が、こんな状況下で地獄を見ている。なんというか、実際に体験してみると、もつとこう、深く暗くて、黒くて、どんよりとしていて、もう何を考えているのかわからぬ幼な感情が、私を立て続けに襲ってきた。「あ、モモも来てたんだ」

言葉に反応し振り返ると、少し長い前髪を顔を振ってよける男性がコートを持って立っていた。た。

「りよう、さん」

にこやかにほほ笑む彼の表情は、病院とは似ても似つかなかった。

「僕もたまに来るんだ。今日は起きてるかな、今日も寝ちゃってるかなあって。何も変わってないけど」

ゆうやー、元気かー、とつぶやきながらベッドをのぞき込む亮さんの表情は、なんとも不思議なほどに穏やかなものだった。

「モモは、来るの初めて?」

首をかしげる亮さんに、私は黙って頷く。

「そうか。見ないほうがいい、とは言えないけど……一回、深呼吸する？ 外でも行くか？」  
亮さんの優しさに触れながら、私は深呼吸をする。

すう、はあ。すう、はあ。

呼吸を整えて、私は静かに首を横に振る。

「いいよ。このまま、見てる」

淡々としか告げられない私に対して、亮さんはそうかと告げて祐也の頭を撫でる。

「頭撫でてやると、喜んでる気がしてさ。あいつ、意外とスキンシップが好きだったなあって」  
手つきは穏やかで。その動きに合わせてるように、祐也は呼吸をしている。

ゼーゼーとした苦しそうな呼吸だけど、私は目を逸らさないように、じつと見つめた。

「はは、そんなに見てたら祐也も照れちゃうぞ。穴があつたら入りたいだろうなあ」  
にっこりと笑う亮さんに、私もそうかもと笑った。

久しぶりの祐也との再会は、どこかぎこちなく、どこか穏やかで、優しい時間が過ぎていった。

その後病室を後にした私達は、病院の購買で色々と物色していた。

「おつ、これ好きなんだよ」

お芋のまんじゅうを手にとって微笑む亮さんだったが、その商品名に私は戦慄した。

「え、それ、鬼まんじゅうって書いてある。ねえ、そんなに恐ろしい食べ物なの？」

私がドン引きしていると、亮さんはぱちくり目を開閉したあとにとどと笑いだした。

「あっはは、知らないのか、モモ。鬼まんじゅう」

「鬼まんじゅう。治安が悪そう」

「違う違う。蒸して作る芋のまんじゅうだよ。俺の地元の食べ物」

亮さんの地元。

そういえば、彼の地元とか、出生とか、そういう個人的なことは一切知らない。

祐也と雫さんは前聞いたけど、亮さんはなんとなく聞きづらくて。

「聞きたいんだろ？ 俺の昔の話」

「え」

もじもじしてたら見透かされていたみたいで、私は露骨に狼狽える。

「ご、ごめんなさ」

「いやいいんだよ。雫も、モモに自分の昔の話しちゃったって言ってたし。だってあの子なら何でも受け止めてくれる気がしてって」

普通お前が受け止める側だつて話だよな、と亮さんは笑う。

「はあ……どこから話そうか。とりあえず場所を移動しよう」

亮さんはそう告げて、私を病院の中庭へと連れて行く。

立派に咲き誇る花の中、私達は腰掛けた。

「単刀直入に言っちゃうとね」

「うん」

「俺、名家の跡取り息子だつたんだ」

「めーか」

「お菓子のメーカーじゃないぞ」

軽くジョークを挟み、亮さんは重いであろう口を開いた。

「俺は長男、跡取りとしてちやほやされた。家はかなり田舎のほうにあつてな。でも塀の中に家は四つ……いや五つ、六つだつたかな。とにかくそんぐらい広い家だつた。地元じゃ俺の名字を出しただけでビビられるような、片田舎だつたよ。本当に」

庭園に枯山水もあつたな、と亮さんはしみじみつぶやいた。

「何の仕事をしているのかは知らない。知りたくもない。ガタイの良い男が、何人も自分の家を回ってるんだ。でも、弟と妹は全く臆することもなくつて。なんだか、違和感がずっとある家だつ

た。学校も行かずに、家で教育機関カリキュラムを作ってそこで勉強してた」

変なシステムだろ？ と亮さんは首をひねった。

「星月家に生まるる者は選ばれし者 他との無駄な親交を掃い、自身の苗字を汚さないために生きよ」

これが家訓だった。そう亮さんはつぶやいて、一瞬うつむく。

「ある日、蔵のほうで一人で遊んでたんだ。俺は弟や妹と違って、塀の外に行きたい子だったからな。一人が好きだった」

そしたら……と、少し亮さんは言葉を詰まらせる。

「蔵の中で、物音がしたんだ。覗いちゃいけないかった。今となっては何だろうって、好奇心を持ったとしても、触れちゃいけないものだった」

「蔵の中で、父親が人の内臓を抉ってた」

「俺は尻込みして、逃げた。物音で父親が気づいて、追いかけてきて」

「押さえつけられて、胸を、刺された」

亮さんはただ黙って、私の腕をそとつかむ。

「ほら」

胸に手を当てさせられ、私はゆっくりりまさぐる。

「う、わ」

本当だ。

左胸の真ん中あたり、抉れたような、ほんのりとした凹凸がある。

「死ぬかと思った。というか、あと数ミリずれてたら死んでた」

「死……」

「辛い俺の叫び声に母親が駆けつけて、祖父や祖母も駆けつけた。父親は家の獄中に閉じ込められてそのまま死んだ。そのまま俺が当主になる予定だったらしい。でも俺は心肺停止、超絶元気に回復したとしても、もう星月として生きることは不可能だった」

人生がそのルートしかなかった。と、亮さんはぼやく。

「それで家を出させられたんだ。エスカレーター式の寮付き小中学校。星月の家訓の名の下、保

証人とかは全部お手伝いさんの名前になってた」

実の親が捨てざるを得なかったことも。

「俺の名字、「ほしづき」じゃあないんだ。本当の名字は「せいつき」だったんだよ。でも、名前の読み方も変えさせられた」

「せいつきりょうさん？」

「本名はそう。実の親に殺されかけて、俺はどうしたらいいのかわからなかったんだ。ずっと。父親は当主のプレッシャーから人を殺して決って遊んでたらしい。正直、そんな奴の子供の価値観なんて歪んでるに決まってるんだ。弟と妹には申し訳ないけど」

「価値観……」

「俺は、何がしたいのかがずっとわからず、ただ毎月送られてくる莫大な金を持って適当に暮らしてただけなんだ」

つまらない人生だよと言って、亮さんは天を仰ぐ。

「でもな。バンドは楽しかったんだ。音楽の自由さ、可能性ってすごいんだよ。ほんの数分前まで元気じゃなかった奴が、曲を聴くと立ち直ったり、感情を操れるんだよ。すごくないか？」

なりたいたものに自由にならせてくれるのが、音楽なんだよなと亮さんはつぶやく。

「俺は何になりたかったのかなんてわからない。他者との関りを妨げられていたからかもしれ

ない。でも、音楽の自由さに惚れた」

自由なんだよ、音楽は。その言葉には、彼にしか言えない重みを感じた。

「自由になりたかったんだ。俺は」

自由。その単語だけでは、なんだか違和感がある。

「自由もあるけど、誰かに認められたかったんじゃないかな」

「え？」

亮さんはきょとんとして、こつちを見てくる。

「自由なこともそう。でも、「せいつき」の人間だから愛されるじゃなくて、亮さんは亮さんのまま、一人の人間として、認められて、ここにいていいんだよって、言われたかったんじゃないかな」  
違ってたらごめん、と私はうつむく。

「私はそのまんまの亮さんが好き。一緒にいて楽しいし、ご飯粒ついてたら取ってくれる」

「お母さんじゃないか」

「でも、笑顔をこらえたり、誰かのために一歩下がっちゃうのはだめだと思う」

私は首を静かに、横に振った。

「鬼まんじゅう、だっけ。それ見て喜んでる亮さんが、私は好きだよ」

へらっと笑って見せると、亮さんは少し口をはくはくさせて、うつむいて。

「ん」

ただ一言そう言って、立ち上がる。

「どしたの、亮さん」

「ちょっと、トイ、レ」

「……うん」

私は笑顔で、頷いた。

「……ばれてるよ」

亮さんが少しだけ声を震わせて、角を曲がる寸前で耐えきれずに袖で涙をぬぐったことも、気づいていないふりをして。

あれから、私はお仕事の合間を縫って定期的に祐也の病院を訪れていた。

「ゆうや」

名前を呼んでも、反応しない。

目がたまに動いたかと思うも、カーテンのそよ風だったり、といったことがたくさんあった。

私だけじゃなくって、雫さんも、亮さんも、もちろん三人で来ることもよくあった。

私たちはバンドでの収入の一部を、祐也の医療費に充てていた。祐也が作ってくれた歌を、今は私たちが借りているだけに過ぎない。ゆつくりと、おじいさんのようにゆつくりと息をす  
る祐也に、私は今日も話しかける。

「高卒認定の勉強、頑張ってるよ」

ゼー、ゼー。

「大変だよ。特に数学。私は文系なのかなあ。微分積分とか、サインコサインとか、ぜんっぜん  
覚えられないの」

こひゅ、ひゅー。

「あのね、それと、十八になったら車校にも行こうと思ってるんだ」

ひゅ、ひゅう。

「うん。時間はないけど、だいぶ前に雫さんにとっておいたほうがいいって。一番に助手席に乗ってね。祐也」

ひゅうう、ひゅう。

「やだ、事故なんて起こさないってば。事故を起こさないために車校に行くの！ 頑張るんだからね！」

こひゅう、ひゅう……

ずっと止まない呼吸音、安定した心拍音。それだけで、祐也が生きているって思える。

私はそれから、いろんなことを話した。

ファンの女の子にスタバのチケットをもらったこと、もうすぐ誕生日が来ること、昨日買ったコンビニのカルポナーラがとってもおいしかったこと。この間ラーメン屋さんに行ったら、キンキンに冷えたお冷でおなかを壊してしまったこと。野良猫スポットの猫が子供を産んで、一匹はぐれてしまったから私が家で飼っていること。

「それで……あ、時間が」

この後は、ラジオゲストに呼ばれている。仕事は、忘れてはならない。休んではならない。

「ごめんね祐也、そろそろ行くね」

ひゅう。

「また来るね。ばいばい」

そつと頭を撫でる。

ぬくもり。

まだ生きてるって、実感できるこの温かみ。

私はそんな状態の祐也に微笑みかけて、そつと病室を後にした。

今日は午後がオフだったので、お昼にコンビニのドーナツをかじったのちに、祐也に会いに行った。

「来たよ」

返事はない。

でも、脈は前より安定してきた。それに、目を開いていたのが、目をつむって眠るようになった

た。目の開閉はできるようになったみたい。

「あのね。今朝、卵を割ったら双子卵だったの」

私は、祐也に話しかけるときに気を付けていることがある。

それは、仕事の話はしないこと。

あんなことを起こしてしまったからかもしれない。でも、なんだかここで仕事の話をするのは違うな、と思ったのだ。

いつものように語っていると、ふとドアが開いた。

「祐也、元気？」

背の高い知らない女性が、私にぺこりと頭を下げる。

「あなたは……」

「初めまして。祐也の母です」

はは、はは、はは？

「お、おかあさ……!?」

「そうです。あなたは、息子のお友達？」

お母さんなんて歳に見えない。艶々の黒髪ロングヘア、ニットカーディガンによく似合う茶色いチェックのスカート。どう見ても、祐也の姉、いや従姉妹、それぐらいには見えるレベルだっ

た。

「あの、えっと、バンド仲間、みたいな……?」

「まああ、そうなの。ごめんなさい、しらなくて……」

「いえ、そんな」

私が首を横に振ると、お母さんはふうと一息ついて、空いているパイプ椅子に腰かけ祐也の寝顔を眺める。

「お父さんが祐也を勘当しちゃって、それから全然、祐也がテレビに出てるとチャンネル変えられちゃって」

げんき? と祐也に問いかける姿は、母親そのものであった。

「祐也って、どんな子供だったんですか」

「どんな、子?」

「はい」

どんな子かあ、と言ってお母さんは天を仰ぐ。

「そうねえ……運動神経もよくって、他の子いじめたりせず、勉強はできなかつたけれど、かわいくて、強くて勇敢で」

「勇敢?」

「ふふ、幼馴染の女の子が蜂に襲われた時、僕がやつつけるんだ！　って。殺虫剤も持たずに、木の棒一本で立ち向かったの」

「そ、そんな無謀な。でも、祐也らしいですね」

「ふふ、でしょう？　この子のお父さんも、そんな祐也をかわいがっていたわ」

あの頃は何かもが楽しかったわねえと、お母さんはくすくす笑った。

「でも、高校進学して、学校辞めてバンドマンになるって……上京していつちゃったの」

「上京……？　ごめんなさい、どちらから」

「青森県の青森から」

「青森!？」

青森って、東京から電車でどれぐらいかかるんだ。たしか、東北の上のほうだろ？　あのリソゴが有名な、青森の、上のほう。

「青森から十五歳の男の子が一人、生きていけるわけなんてないの。そうわかっていて、私もお父さんも止めたわ。お父さんなんて、祐也を殴っちゃうぐらいだった」

殴る、という単語に私はひゅつと息をのむ。

「でも、祐也は聞かなかったの。行く当てるはあるって。お父さんも怒っちゃって、お前の顔なんか二度と見たくない、って言っちゃってね。祐也もヘソ曲げて、そんなに嫌なら望み通り出て行っ

てやる、って……それで、本当に行っちゃった。夜行バスに乗って、一人で」

「一人で……」

さみしそうな顔を浮かべながら、お母さんは続けた。

「お父さん、それからもうカンカンよ。もうずーっと怒ってる。でも、バンドで売れ出してから、こっそりCDも買ってみたいだけだ」

おかしいわよね、と言って、お母さんは笑う。

「麻薬の事件が出た時だって、お父さんは怒ってはいたけど、部屋で泣いていたの。俺はどうすればいいんだって。不器用な人よねえ」

困っちゃうわ、とお母さんは笑う。

「会いたくないって言っちゃった手前、会いにくいみたい。フフツ、おかしいわよね。今だってその庭先からこっち見てるのに」

お母さんが窓の外を指さすのでそちらのほうを見てみると、いかにも昭和の男と言わんばかりの白シャツに清潔感のあるパンツをはいた男の人が、こちらをチラチラ見ていた。

「あれが、祐也の」

お母さんが手を振ると、お父さんはそっぽを向いてしまう。

「そうよ、似てるでしょ?」

「ふふ、確かに」

そつぽの向き方が、祐也そっくりだ。そのあとに、つま先で土をいじるところも。

「あのちよつとだけ猫背なところ、似てるの。一人息子だから、やっぱり会いたみたい。アイドルが邪魔してるみたいだけど、ね」

お母さんは笑って、あらもうこんな時間と腕時計を確認する。

「目が覚めたら、この子よろしく伝えておいて」

「え、もう行っちゃうんですか？」

「ええ。お父さんの我慢が続いてるうちに」

我慢って、と私が戸惑っていると、お母さんは祐也の頭を撫でた。

「じゃあね。またくるね」

それだけ言って、私にも挨拶をして行ってしまった。

背筋がしゃんとしていて、凛としていて、本当に、優しいお母さんだった。

お父さんも、きっと祐也が心配で、そんなことをしてしまっただろう。だとしたら、祐也のために泣いたり、遠方から足を運んだりしない。

「いいなあ、家族って」

二人になった病室で、私はそう呟いた。

そして祐也が意識を取り戻し、会話ができるようになったのは数日後のことだった。

「面会謝絶!?!」

医師からそう聞かされ、私も亮さんも雫さんも戸惑う。

「どういう、ことですか」

亮さんが冷静に聞き返すと、医師が落ち着いて聞いてくださいと今一度念を押す。

「もしかしたらあなたたちに、危害を加えるかもしれないんです。脳の奥のほうで嫌な記憶がうずいて、あふれてしまうかも」

負の感情が溢れたら、どうなるか分からないと、医師は続けた。

「とりあえず写真を見せます。それで、悪い反応があったらまた伝えます」

「お、お願いします」

私たちはぺこぺこ頭を下げて、とりあえず話し合うために中庭に出た。

その間、医師が私たちの写真を祐也に見せたみたいで、反応を亮さんに伝えに来る。

「とりあえずは何ともないって。今からでも会えるみたいだ」

今から、祐也と会える。

期待であふれて、嬉しいことのはずなのに、私の足は動かなかった。

「私に行くわ」

「雫……」

「殴られてもかまわない。もう一度、会話だけでもいいからしたい」

真剣な目の雫さんに触発されるように、亮さんもよし、と告げる。

「俺もだ。モモは？」

正直、会いたいのか会いたくないのかわからない。

怖がついていても、仕方ないのかもしれない。

じゃあ無理やりにでも会って、話したほうが。

「モモ、モモー」

雫さんに背中をたたかれ、私ははっとする。

「ご、ごめんなさい、わたしも」

「だめ」

雫さんはただ黙って、私の肩を強く握った。

「気持ち作ってから会いなさい。そんな気持ちで行っちゃだめ」

私のビビった心はすっかり見透かされていたようで、私の心はどきりと大きく跳ねる。

「恐怖は、人に伝染する」

わかった？　と言われてしまい、私の体は帰るといふ選択を取ってしまう。

「すみません。帰ります」

「いいのよ。また来なさい」

「そうだよ。気持ち作って、ね」

私は、二人に向かって頭を下げて、帰り路を歩く。

亮さんも雫さんも優しい。

みんな、優しいんだ。

「う、ううう」

それなのに、私はだめだ。

だめだめだ。

泣きながら帰る私の耳を貫いたのは、スクランブル交差点に差し掛かる大きなモニター看板で流れる、あの頃の私たちの映像だった。

『もっと盛り上がっていこうぜええええええ!!』

キラキラした笑顔。

『ギターッ!』

祐也も、雫さんも、亮さんも。

『楽しんでますかあああああああああ!?!』

もちろん、私も。

「私、こんなに笑顔だったの」

クレイジークローラー、復活。

前まではその単語をいちいち気にして、祐也が来るまではまだ復活してないと聞かなかった心が、爆ぜる。

この感情は、なんだ。

自分のライブの笑顔が、どアップで映し出される。

その直後、私は祐也に、祐也は私にと、お互いにマイクを投げ合って歌う。

「マイクの、交換……」

そうだ。

ステージではいつも真っ白で、パフォーマンスのことしか考えていなかったけれど。

俯瞰してみても、今気づいた。

「私、こんなに楽しかったんだ」

私の頬を、暖かいものが伝う。

なぜ、私は気づかなかつたんだろう。

一番近いあなたの、一番わかりやすい笑顔に。

「ごめん、祐也」

もう、背けるな。

もう、忘れるんじゃない。

「今から行く」

私は、病院に向かって引き返し、突き進んだ。

「祐也」

病室の扉を開けると、もう雫さんも亮さんも帰っているようで、祐也一人だけだった。

祐也はベッドに座って、カーテンの向こうの景色を眺めていた。

「おおー、おおお」

私に気づくと、祐也はこっちに笑いかけてくれる。笑顔は何となく面影があつて、なんだか

涙が出そうだ。懐かしい。怖気づいていた私が、バカみたいだ。

おじいちゃんみたいいな声、と私が笑うと、あっはっはと笑われてしまう。「ごめんな、だれかわからないや」

もう、きょうはそういうこと、ばっかりだ、と祐也は続ける。

「ああ、おれ、ほんとだめたな。もう、わかんないやつしか、いなくって」  
自己嫌悪に陥り始める祐也の頭を、私はそっと撫でた。

「だいじょうぶ。安心して」

あの眠っているときのよう。

そうすると、祐也は安心したようにありがとうとつぶやく。

「そうだ。ゆうや、これ、きいてくれる？」

「おお、これ、なんだ？」

「おんがくだよ。今から流すね」

「はあ、なんだその薄い板、べんりそうだなあ」

私はスマホに驚く祐也に、にこりと微笑みながら曲を再生する。

私が今、ゆうやに聞かせてるもの。

それは、あの日ハミングした曲だ。

「おれ、この曲知ってる」

片言ではあるが、そう繰り返す祐也。

「知ってる、知ってるんだ。なんだこれ、なつかしいなあ、なんだか本当に昔に、聞いたことがあるような気がするぞ」

私は、静かに頷いた。

「そうだね」

祐也は心底嬉しそうに、曲を聴きこむ。そのうちにリズムも取り始め、なんとなくでしかないハミングだけでも歌も歌い始めた。

しゃがれた声は、聴きとりづらくて、枯れていて、それでも私の耳には彼が引くギターのように華やかに聞こえた。

そうして曲を聞き終わったあと、祐也はにつこり笑ってこう言った。

「おれもギター、はじめようかなあ」

ロッキンブルーな君に捧ぐ

変わっていく君に

僕は怖気づいてしまったんだ

これからのこと あしたのこと

もう過ぎ去った昨日のことだって

知りたがる君に

僕は ひるんでしまった

冷たいまなざし むけられそうで

どうせ変わるなら

僕も連れて行ってくれないか？

どんなところでもいい

どんな場所でもいい

どんな世界でも、いい

居場所なんて 君の隣にいくらでも あるから

堕ちていく君に

僕は戸惑ってしまった

時間なんて 有限で

僕はどうしたらいいのか わからないまま

なんにもない 深いところ

さよなら告げる君がいる

足元 誰かにつかまれてるくせに

傷ついでるくせに

哭いてるくせに

どうせ一人になるなら

僕を連れて行ってくれよ

動けなくなる前に 立てなくなる前に  
僕の手を取って

どうせ変わってしまうんだろ？

じゃあ 僕を連れて行けよ

君のこと一生見張ってやるから

早く 笑えよ

どうせ願うなら

僕は 幸せに笑う君が 見たいよ

『ロッキンブルーな君に捧ぐ』

ロッキンブルーな君に捧ぐ

# 作品告知欄



本と、貴方の心を借ります。

「著」優詩織 「画」さくら怜音

(定価 330 円 (10%税込))

仕事を接点に、二人の男は恋に落ちる。

だが、物事はそう簡単に動くのか……

教師×図書館司書の現代 BL ！

## 作品告知欄



子羊は今夜、肉食龍に食される  
「著」優詩織 「画」陽名ユキ  
(定価 495 円 (10%税込))

一目惚れしたので、拉致しました。

天然少女と肉食イケメンのとろけるよう  
な恋愛劇！

ロッキンブルーな君に捧ぐ  
「著」優 詩織 「画」松山璃音

---

2022年2月8日 発行

発行 名古屋デザイン&テクノロジー専門学校

印刷 オンデマンド

連絡先 [youshy1001@gmail.com](mailto:youshy1001@gmail.com)

---

無断転載・転記禁止